

富田林市埋蔵文化財調査報告 13

中野遺跡・宮林古墳発掘調査概要

1985.3

富田林市教育委員会

はじめに

富田林市は、石川によって形成された河岸段丘面、あるいは周辺の山地から派生した丘陵上に数多くの埋蔵文化財を有しています。

過去5年間国庫補助を受け、市内の埋蔵文化財の緊急発掘調査を大阪府教育委員会の指導と協力のもとに進めてまいりました。その結果、中野遺跡の範囲を知る上で貴重な資料を得たこと、さらには、宮林古墳の調査によって、石川中流域における前期古墳の一例を知ることができました。

最後に、調査にあたりご指導・ご協力賜わりました方々に深く感謝申し上げます。

昭和60年3月

富田林市教育委員会

教育長 福田治平

例　　言

1. 本書は、富田林市教育委員会が昭和59年度に国庫および府費の補助を受け、発掘調査を実施した中野遺跡及び宮林古墳の概要報告書である。
2. 調査は、富田林市教育委員会社会教育課 中辻亘を担当者とし、昭和59年4月12日に着手し、昭和60年3月30日に終了した。
3. 調査を実施するにあたり、下記の諸氏から格別の助言や援助を受けた。記して感謝の意を表します。
北野耕平（神戸商船大学教授・富田林市文化財調査会委員）・玉井功・小林義孝（以上、大阪府教育委員会）・山本彰（財団法人大阪文化財センター）・富賀肇（府立藤井寺高等学校）・竹谷俊夫（天理大学附属天理参考館）
4. 本書の執筆は、各々文末に記すものがあたった。
5. 宮林古墳出土の管玉および赤色顔料の分析を、大阪府立藤井寺高等学校教諭 富賀肇氏にお願いした。また、宮林古墳墳丘上焼土壙1から出土した骨の鑑定を、大阪府立農芸高等学校教諭 松尾正敏・北園功両氏にお願いした。
6. 本書の編集は中辻が中心に行った。また、製図については、遺構を岡本武司が行い、遺物は中野遺跡を田川友美が行い、宮林古墳を粟田薰氏の援助を受けた。尚、宮林古墳出土遺物の写真撮影には、阿南辰秀氏の協力を得た。

調　　査　参　加　者

浅野隆志・大橋圭子・岡嶋智美・岡本武司・奥田正己・杉山泰敏・田川友美
仲井和代・平井陽一・福田恵子・本並宏介・本並俊哉・松本晃尚・村井正幸

本 文 目 次

はじめに

例 言

	頁
I 中野遺跡の調査成果	3
1. 84—I区	3
(1)層 序	3
(2)遺 構	3
(3)出土遺物	5
2. 84—II区	5
(1)層 序	6
(2)遺 構	6
(3)出土遺物	6
3. 84—III区	8
(1)層 序	8
(2)遺 構	8
4. 84—IV区	8
(1)層 序	8
(2)遺 構	9
(3)出土遺物	10
まとめ	11
II 宮林古墳の調査成果	12
1. 調査に至る経過	12
2. 位置と環境	12
3. 古墳の外形と内部構造	17
4. 主体部出土遺物の配列	18
5. その他の遺構	20
6. 出土遺物	26
まとめ	33

表 目 次

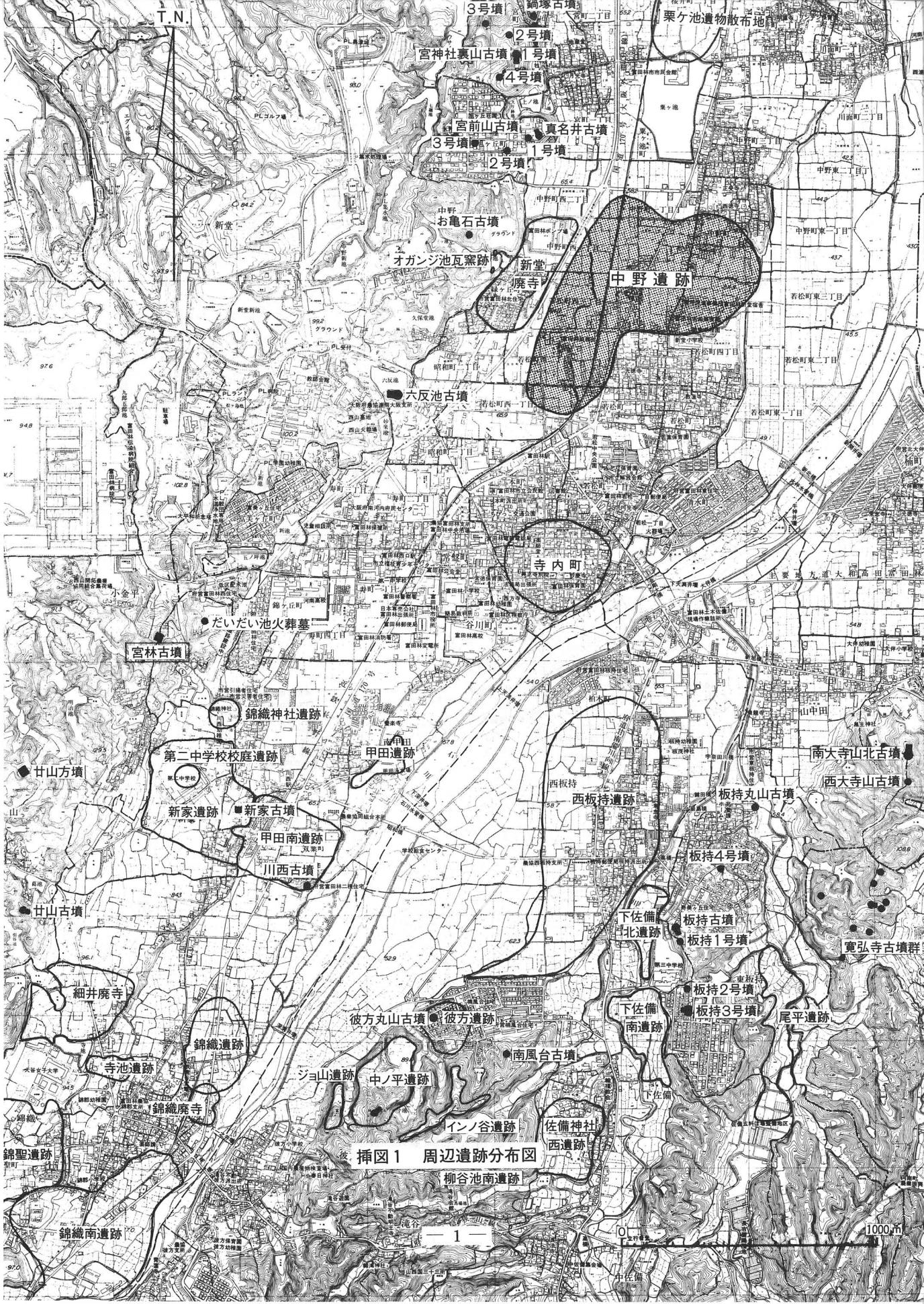
	頁
表1 調査一覧表	3
表2 土壙およびピット一覧表	25
表3 鉄鎌の法量表	27
表4 管玉の法量表	30

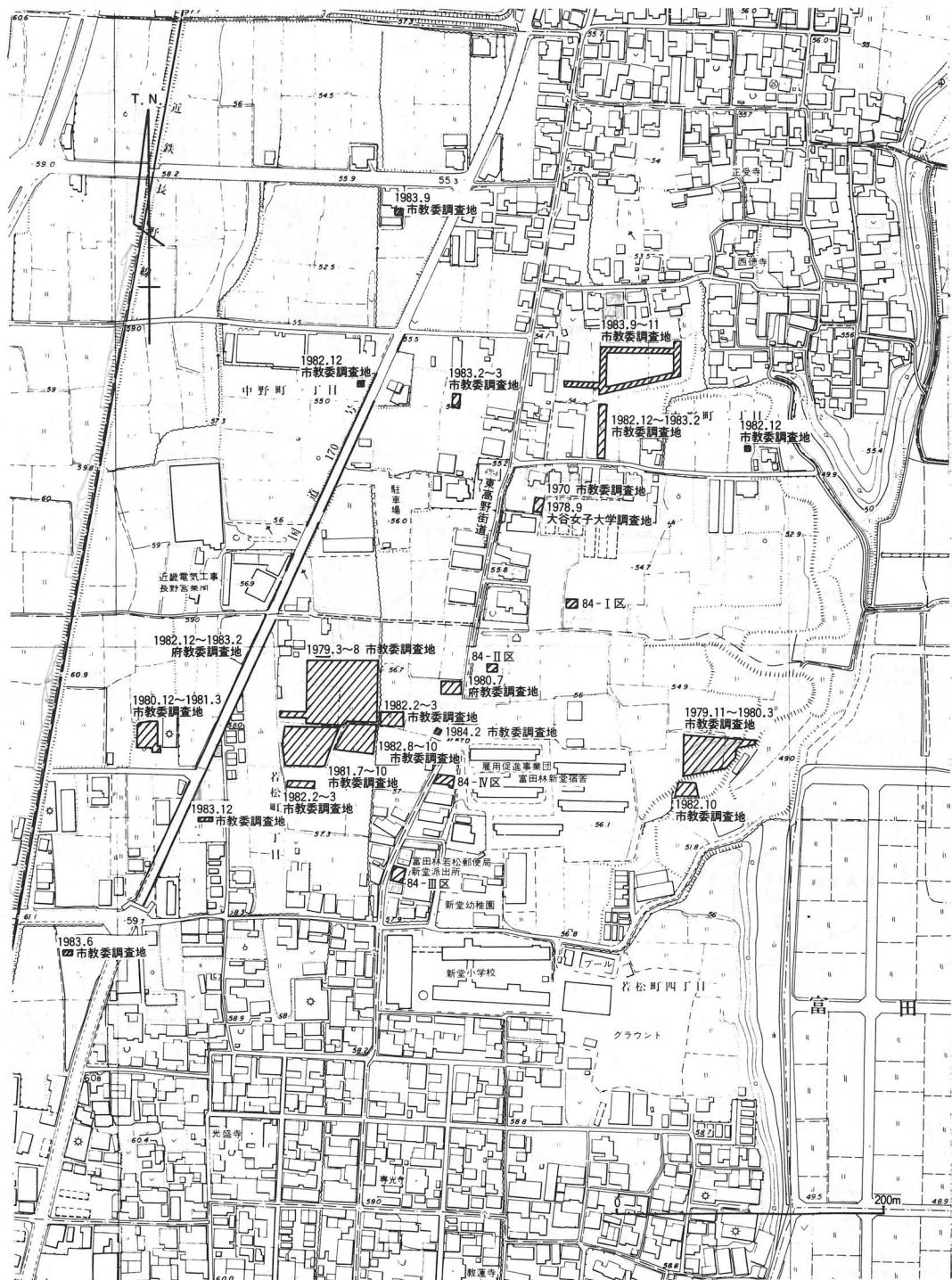
挿 図 目 次

	頁
挿図1 周辺遺跡分布図	1
挿図2 中野遺跡発掘調査地点地域図	2
挿図3 遺構平面図・断面図	4
挿図4 ピット2出土瓦	5
挿図5 地山直上、第1層出土土器、表採石器	6
挿図6 遺構平面図・断面図	7
挿図7 遺構平面図・断面図	9
挿図8 包含層出土遺物	10
挿図9 墳丘実測図	13・14
挿図10 墳丘断面図	15・16
挿図11 主体部断面図	18
挿図12 主体部平面図	19
挿図13 その他の遺構位置図	20
挿図14 火葬墓平面図・断面図	21
挿図15 土師器甕出土状況	22
挿図16 燃土壤平面図・断面図	23・24
挿図17 土壙およびピット平面図・断面図	25
挿図18 宮林古墳出土鉄製武器	28
挿図19 宮林古墳出土鉄製工具	29
挿図20 宮林古墳出土管玉	30
挿図21 奈良時代およびその他の遺物	31
挿図22 燃土壤出土鉄釘	32

図 版 目 次

図版1	遺跡周辺航空写真
図版2 (上)	第1面 遺構全景 西から
(下)	第2面 遺構全景 西から
図版3 (上)	ピット2遺物出土状況 北から
(下)	ピット2出土瓦
図版4 (上)	遺構全景 東から
(下)	地山直上、第1層出土土器、表採石器
図版5 (上)	遺構全景 東から
(下)	包含層出土遺物
図版6 (上)	古墳遠景航空写真 南から
(下)	古墳近景航空写真 東から
図版7 (上)	試掘時トレンド全景 西から
(下)	墓壙検出状況 西から
図版8 (上)	木棺部痕跡検出状況 南から
(下)	同 上
図版9 (上)	木棺部完掘後全景 南から
(下)	木棺内遺物出土状況 南から
図版10 (上)	木棺内遺物出土状況 北から
(下)	木棺内中央西端部鉄劍出土状況 東から
図版11 (上)	木棺内南東部鉄鎌群および漆塗製品出土状況 北西から
(下)	木棺内南東部鉄鎌群出土状況 南から
図版12 (上)	木棺内南部鉄製工具および鉄鎌群出土状況 東から
(下)	木棺内南西部鉄製工具出土状況 東から
図版13 (上)	墓壙南半部完掘後全景 南から
(下)	墓壙完掘後全景 南から
図版14 (上)	墓壙完掘後近景 南西から
(下)	同 上 南から
図版15 (上)	火葬墓全景 東から
(下)	同 上
図版16 (上)	火葬墓全景 北東から
(下)	火葬墓中央土壤河原石出土状況 南東から
図版17 (上)	土師器甕散布状況 北から
(下)	調査区全景 南から
図版18 (上)	燃土壤半掘時全景 西から
(下)	燃土壤全掘後全景 西から
図版19 (上)	燃土壤1牛骨出土状況 西から
(下)	同 上
図版20 (上)	北斜面東半部遺構全景 北東から
(下)	北斜面西半部遺構全景 北から
図版21	木棺内出土鉄製武器
図版22	木棺内出土鉄製工具
図版23	木棺内出土玉類・漆塗製品
図版24	奈良時代の土器、その他の土器、燃土壤出土鉄釘・牛骨





挿図2 中野遺跡発掘調査地点地域図

I 中野遺跡の調査成果

地区	申請者	調査理由	所在地	調査期間
I	村本正一	個人住宅建設	富田林市中野町2丁目525-3	59.4.12 ~4.14
II	西條義信	個人住宅建設	富田林市若松町4丁目602-4	59.6.14 ~6.15
III	西田豊信	個人住宅建設	富田林市若松町4丁目627-7	60.1.8
IV	豊田寅太郎	個人店舗付住宅建設	富田林市若松町4丁目630-1	60.1.9

表1 調査一覧表

1. 84-I区

本調査区は、遺跡の東半部、東高野街道の東に位置する標高54.7mの田である。調査は、南北1.4m、東西2.7mの範囲で実施した。検出した遺構は、溝1、ピット2および落ち込み1である。

(1) 層序

耕土（第1層）および床土（第2層）の厚さは約25cmある。部分的に床土（第2層）上層に3～5cmの厚さの灰褐色土が堆積する。調査区東半部では、床土下に東に厚く5～10cmの濁灰褐色土（第3層）が堆積する。遺構は、床土（第2層）上面と地山面を掘り込んでいる。

(2) 遺構

溝

床土面を掘り込んで作られた溝である。幅25cm、深さ6cmを測る。西方向の溝に南北に直交するT字状を呈している。埋土は、茶灰褐色土である。

ピット1

調査区西端で検出した。砂礫の地山面を掘り込んでいる。径約70cmのほぼ円形を呈すると思われる。深さ33cmを測る。埋土は、暗灰褐色粘質土で6~17cmの円礫を含む。

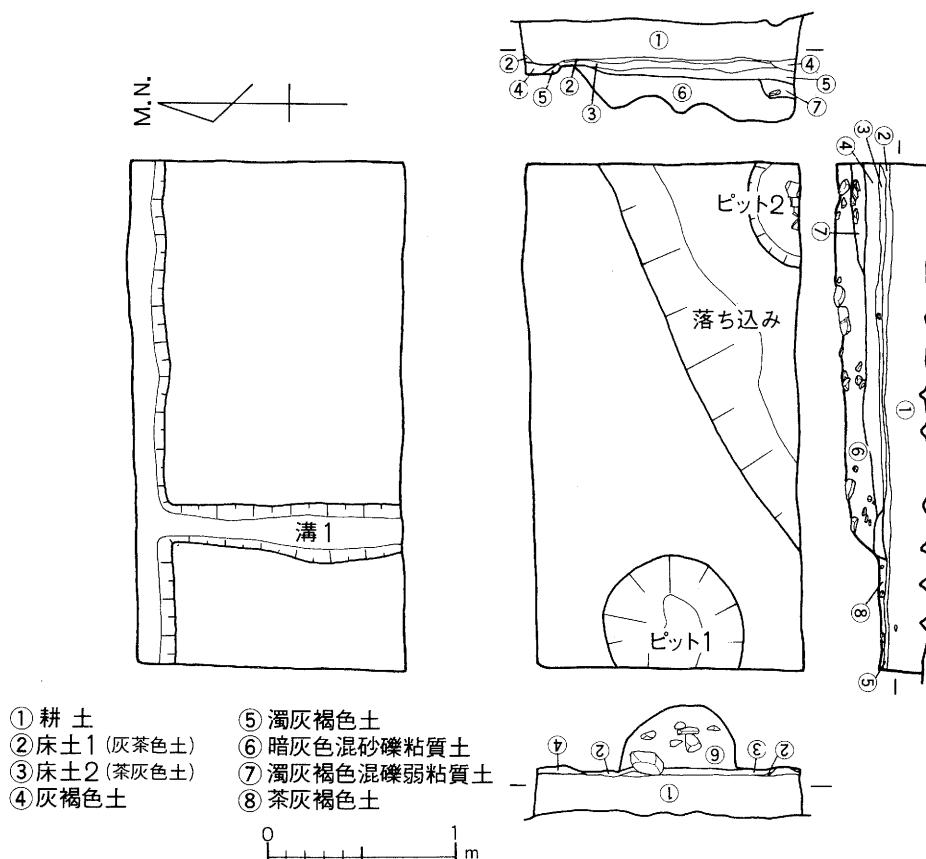
ピット2

調査区南東隅で検出した。大半が壁内にあるため正確な規模は不明であるが、南断面での深さは7cmを測る。埋土は、濁灰褐色混礫弱粘質土である。

落ち込み

調査区南東部にあって、ピット2によって切られている。北東から南西方向に肩部で長さ2.3m分を検出した。南断面では深さ13cmを測る。埋土は暗灰色混砂礫粘質土である。落ち込み上面のみ濁灰褐色土（第3層）が認められる。

(中辻)



挿図3 遺構平面図・断面図

(3) 出土遺物

遺物は、溝、ピット1、ピット2、第2層、第1層から出土している。

溝

弥生土器、瓦が出土している。瓦は、硬質の平瓦である。

ピット1

弥生土器、サヌカイトの石核、剝片が出土している。弥生土器は、底部が1点、生駒西麓産の胎土をもつものが1点含まれている。

ピット2

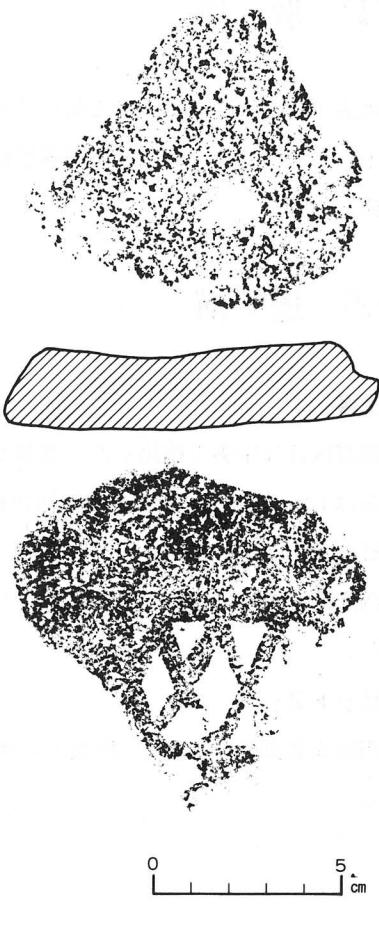
土師器、瓦器、瓦質土器および瓦が出土している。瓦は、丸瓦と平瓦があり、ともに硬質のものである。平瓦の凸面には、縄目叩きが施されるもの、斜格子叩きが施されるもの(挿図4)ナデが施されるものがある。

第2層

弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、瓦およびサヌカイトの剝片が出土している。瓦は、硬質の平瓦である。

第1層

弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦およびサヌカイトの剝片が出土している。須恵器には、脚部が1点含まれている。瓦には丸瓦と平瓦があり、ともに硬質のものである。平瓦には、凸面に縄目叩きが施されるものと、ナデの施されるものがある。



挿図4 ピット2出土瓦

(田川)

2. 84-II区

東高野街道のすぐ東に隣接する。標高56mの田である。南北2.2m、東西約1.5mの調査区である。検出した遺構は、ピット3および土壌1である。

(1) 層序

地表下約30cmが耕土（第1層）である。耕土直下は地山で、部分的に厚さ約5cmの濁灰色粘質土、褐灰色粘質土および灰褐黄色粘質土（第2層）が堆積する。黄色の地山面を掘り込んで遺構がある。

(2) 遺構

土壤

調査区ほぼ中央で検出した。北側が耕作時に削平されているため、形状等は不明であるが、深さは12cmを測る。埋土は暗褐灰色粘質土である。

ピット1

西断面中央部で検出した。断面での深さは13cmある。埋土は暗褐灰色粘質土で若干の小礫を含む。

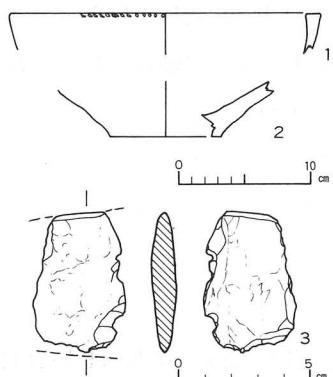
ピット2

西断面北部で検出した。断面での南北長は50cm、深さ16cmを測る。埋土は暗褐灰色粘質土である。

(中辻)

(3) 出土遺物

遺物は、土壤、地山直上、第1層、表採から出土している。



土壤

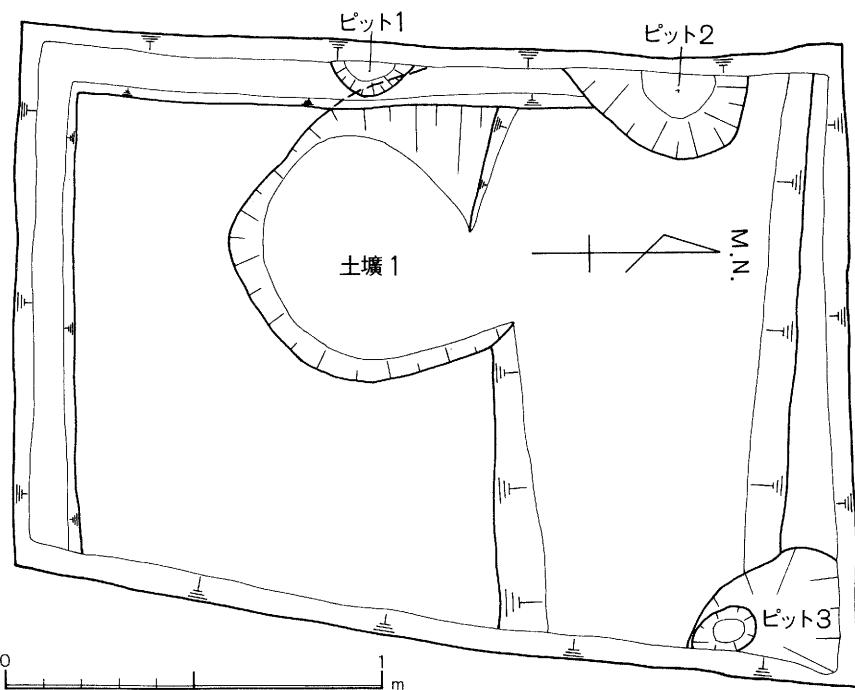
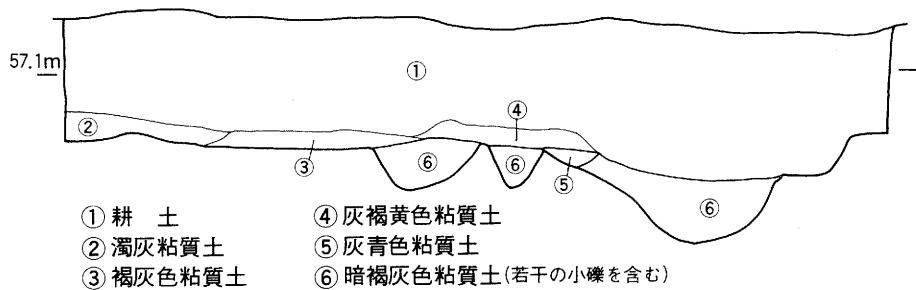
弥生土器の細片が出土している。

地山直上

弥生土器、瓦質土器が出土している。弥生土器は、高杯が1点含まれている。

高杯（挿図5-1）口径22.2cm、残存器高3.1cmを測る。口縁部のみ残存する。口縁部は

わずかに内彎して立ちあがる直口である。口



插図6 遺構平面図・断面図

縁端部は、内外両方に肥厚し、外端面に刻み目が施されている。色調は、内面灰褐色、外面明褐色を呈している。

第1層

弥生土器、土師器、須恵器、瓦、鉄器およびサヌカイトの剝片が出土している。弥生土器は底部が1点ある。瓦は、暗黒灰色の硬質の丸瓦と、暗茶褐色の硬質の平瓦がある。

底部（挿図5-2）底径8.4cm、残存器高4.2cmを測る。底部のみが残存し、全体に磨滅しており調整は不明である。色調は明褐色を呈している。

表採

石庵丁が採取されている。

石庵丁（挿図5-3）長さ5.4cm、幅3.5cm、厚さ0.95cm、重量4.23gを測る。緑色片岩を石材としている。全体に遺存状態が悪い。

(田川)

3. 84-Ⅲ区

本調査区は、東高野街道の東に隣接する。現況は約35cmの盛土があり、建物の基礎が盛土内に納まるため、径1.2mの便槽部分の範囲に限定した。

(1) 層序

地表下約35cmが盛土（第1層）である。盛土下には旧耕土（第2層）および旧床土（第3層）が厚さ25cmある。旧床土下には、上から順に灰褐色弱粘質土（第3層）、濁灰茶色弱粘質土（第4層）および濁灰黄色弱粘質土（第5層）がそれぞれ約5cmの厚さで堆積する。黄褐色粘土の地山直上には、濁灰褐黄色粘質土（第6層）が約14cmの厚さで堆積する。

(2) 遺構

地山上に暗灰黃褐色粘質土および灰黃褐色粘質土の埋土をもつ徑10cm前後の浅い落ち込みが認められたのみである。

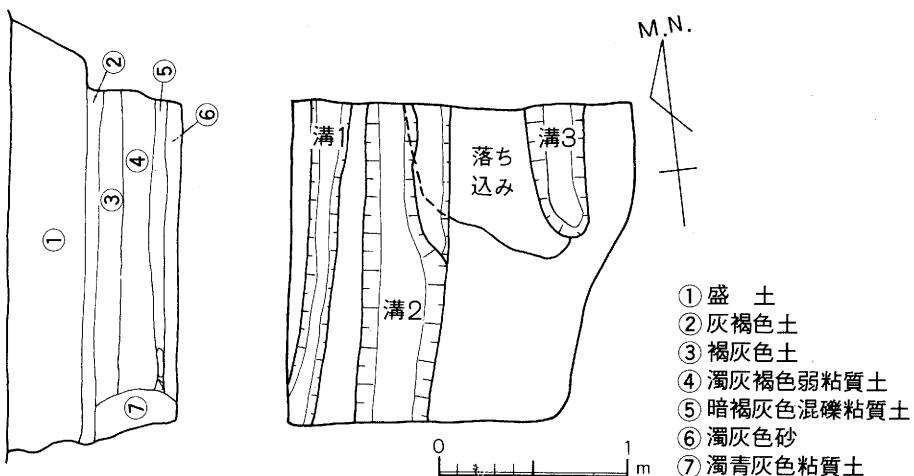
(中辻)

4. 84-Ⅳ区

本調査区もⅢ区同様に東高野街道の東に隣接している。南北1.8m、東西1.7mの範囲で調査を実施した。検出した遺構は、溝3、落ち込み1である。

(1) 層序

地表下約40cmが盛土（第1層）である。盛土下には、上から順に約8cmの厚さで灰褐色土（第



挿図7 遺構平面図・断面図

2層)、約13cmの厚さで褐灰色土(第3層)、約16cmの厚さで濁灰褐色弱粘質土(第4層)、約6cmの厚さで2~20cmの礫を含む暗褐灰色粘質土(第5層)、約8cmの厚さで濁灰色砂(第6層)が堆積する。遺構は、黄褐色粘土の地山を掘り込んでいる。

(2) 遺構

溝1

調査区西端部を南北方向にのびる溝である。幅20cm、深さ6cmを測る。断面は皿状を呈している。埋土は濁灰色砂で、暗褐灰色粘質土がブロック状に混じり、炭片を含む。

溝2

溝1の東に位置し、溝1と同じく南北方向にのびる溝である。幅45cmで、最も深いところで7cmの深さを測る。北半部では、東肩に幅14cm程度の平坦面を持ち、二段に落ちている。埋土は濁灰色砂に暗褐灰色粘質土がブロック状に混じり、炭片および1cmから拳大の礫を含む。

溝3

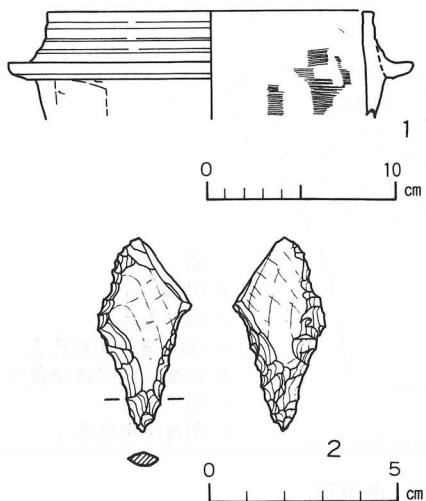
調査区北東部で検出した南北方向の溝である。幅30cm、深さ8cmを測る。北壁から70cmで途切れている。埋土は灰褐色粘質土である。

落ち込み

調査区北端、溝2と溝3の間で検出した。溝2および溝3によって切られており、正確な形状は不明である。北壁断面での深さは11cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土である。

(中辻)

(3) 出土遺物



挿図8 包含層出土遺物

溝3

瓦質土器が出土している。

落ち込み

弥生土器およびサヌカイトの剥片が出土している。

第6層

弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、瓦およびサヌカイトの剥片が出土している。瓦は平瓦で、軟質のものと硬質のものがある。

第5層

弥生土器、須恵器、青磁、瓦、石錐およびサヌカイトの剥片が出土している。弥生土器は高杯である。須恵器には杯蓋が含まれている。青磁は、内面に蓮弁文が施された碗である。瓦は凸面に縄目叩きが施された硬質の平瓦である。

石錐（挿図8-2） 長さ5.15cm、幅2.45cm、厚さ0.8cm、錐長1.55cm、錐径0.8cm、重量8.4gをはかる。サヌカイトの横長剥片を素材とした不定形の大きな頭部下端に先細りの錐部をもつ石錐である。左面上方には大剝離面が、右面上方には主要剝離面が残っている。錐部は両側辺から調整剝離が施され、錐部断面は菱形を呈している。

第2層から第4層

土師質土器の羽釜が出土している。

羽釜（挿図8-1） 口径17.1cm、鍔径21.3cm、鍔幅1.4cm、残存器高5.7cmをはかる。口縁部はやや内傾して立ち上がる有段の口縁部である。鍔はやや上方に短かくのびる。口縁部内外

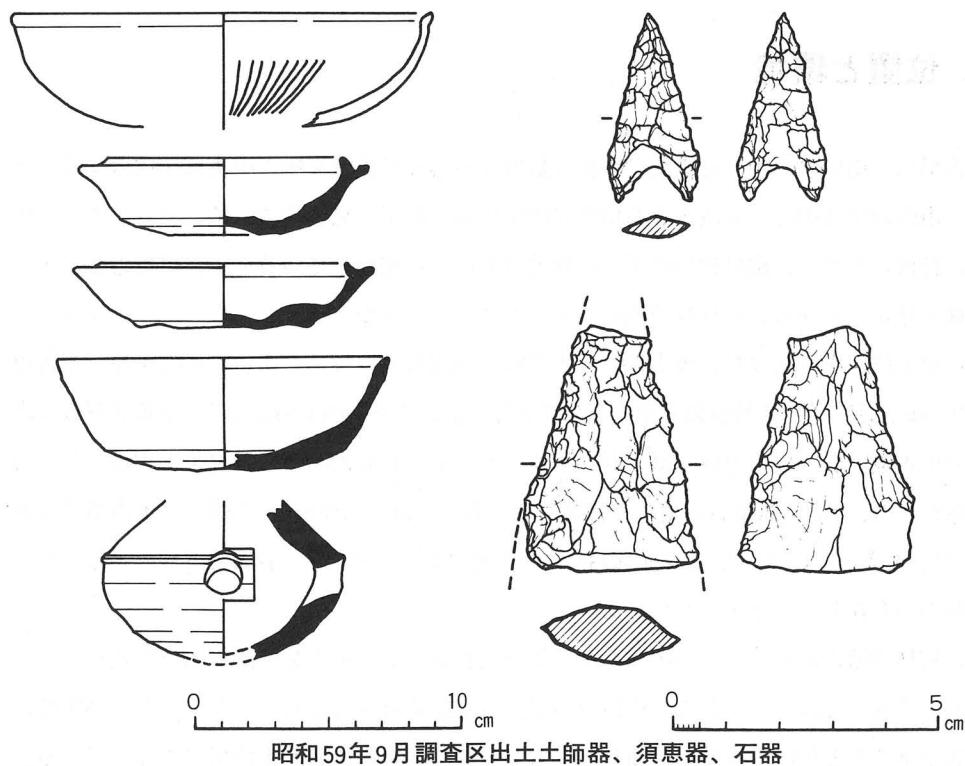
面、鍔部内外面とともにヨコナデ調整が、体部内面には刷毛目調整が、体部外面にはヘラケズリ調整が施されている。また、体部外面には煤がべつとり付着している。

(田川)

ま　と　め

今回の調査対象地となったのは中野遺跡の東半部、東高野街道より東に限られた。調査区の発掘面積は狭小ではあったが、街道沿いに南北にトレントを開けたことになり、弥生集落の推定範囲のほぼ中央付近にあたる。各調査区の包含層からは弥生時代中期から中世に至る遺物が出土しており、従来の中野遺跡の時代推定と一致するものである。また、弥生時代の遺構についてみると、I区ではピット1、II区では土壙およびピット1～3、IV区では落ち込みが該当する。I区のピット2では奈良時代の瓦が出土しており、同時代の遺構が調査区周辺に存在することが判明した点で、今回の調査は資料として貴重である。

III区は、当初の遺跡の範囲からは外れてはいたが、隣接地ということで調査した結果、断面観察等から周辺に遺構が存在することが想定される。更に、昭和59年9月に遺跡の南西端隣接地でも古墳時代後期の遺物を伴う遺構を発見するに至り、中野遺跡が拡がることが判明した。



II 宮林古墳の成果

1. 調査に至る経過

宮林古墳は、大阪府富田林市甲田585-1・618-35に所在する。本古墳の存在は、富田林市教育委員会が昭和46年から昭和51年にかけて遺跡の分布調査を実施した際に、「古墳の可能性あり」と推定されていた。^(注)

昭和58年4月に、土地所有者から個人住宅建設の計画があがり、昭和58年6月3日に事前調査を実施した。調査は、南北約5m、東西1.7mのトレンチを開けて遺構の有無を確認する方法をとった。地表下約30cm掘り下げた時点で、西壁に鉄器の存在を確認した。さらに面積を拡張して精査した結果、古墳の主体部を検出し、鉄器が古墳時代前期の特徴を持つ椿葉形の鉄鏃であることが判明した。

この調査結果から遺跡の発見届けを受理し、昭和59年9月22日に本格的な発掘調査を開始する運びとなった。

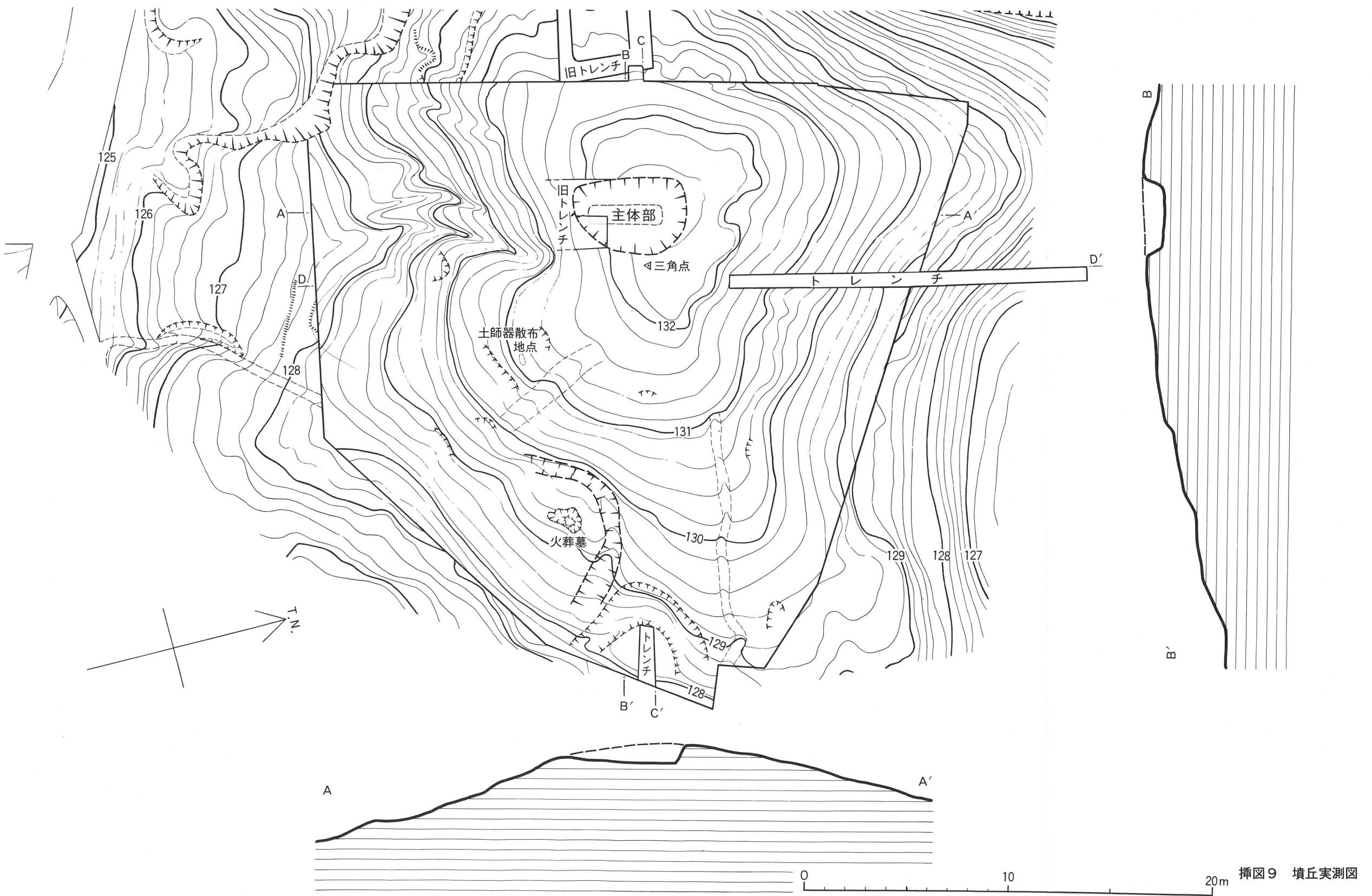
(注) 富田林市教育委員会『富田林市の埋蔵文化財 一埋蔵文化財基本分布図一』(1978年)

2. 位置と環境

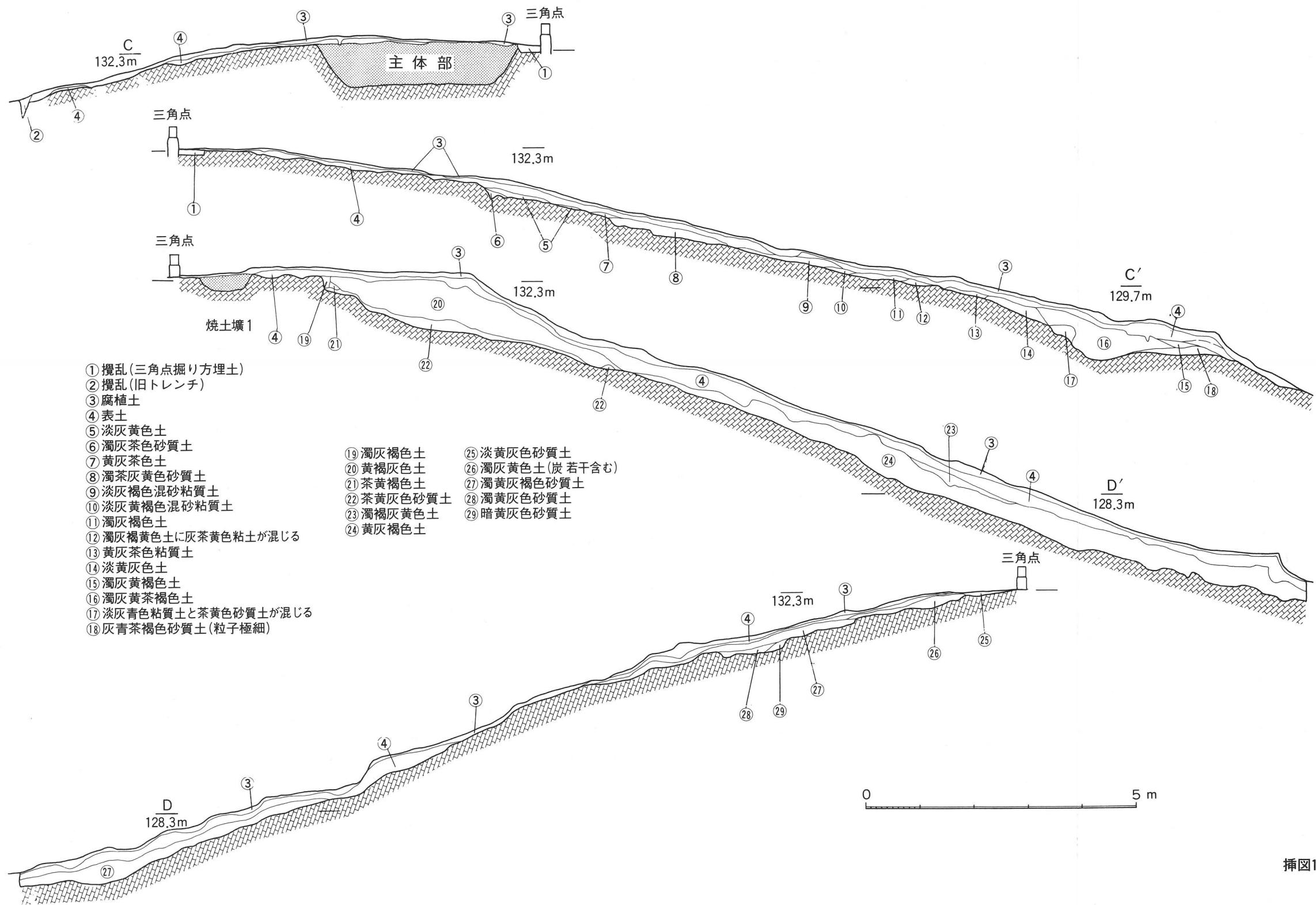
宮林古墳は、市域の西半部を南北に細長く形成する羽曳野丘陵東縁の中央部に位置する。本古墳は、市内のほぼ中心を北流する石川西岸の平坦面を眼下に見る景勝の地にある。また、甲田集落の背後にあたり、錦織神社の西に宮林池等を隔てて相対している。本古墳付近は、小字名を宮林と呼ぶことから、同神社の境域であったことがうかがえる。

宮林古墳の位置する羽曳野丘陵上には、古墳時代前期および後期の古墳が点在する。本古墳の北東2.5kmには、三角縁神獸鏡を出土した真名井古墳、また南西1.2kmには、定角式銅鏃を出土した廿山古墳といった前方後円墳が存在する。本古墳の北東2kmには、終末期古墳として有名なお龜石古墳、さらにお龜石古墳の被葬者と強い関係を持つ新堂廃寺、同じく本古墳の南西1.7kmには、古墳と古代寺院との関連性を持つ南坪池古墳等が分布し、石川中流域の平地を基盤とした勢力の存在したことを示している。

一方、宮林古墳の前面に広がる中位および低位段丘面には、条里制地割が明瞭に遺存しており、これと重複するように、縄文時代以降の多くの集落遺跡が営まれる。このうち、弥生時代中期の集落址である甲田南遺跡、古墳時代から室町時代の新家遺跡が本古墳に近接している。



插図9 墳丘実測図



挿図10 墳丘断面図

3. 古墳の外形と内部構造

外形

本古墳は、北斜面において、焼土壙やさまざまな土壙、ピットが見られる他、東斜面では、奈良時代の火葬墓と思われる遺構や現代の開墾の痕跡が見られる。又、南斜面においても、現代の開墾の痕跡が著しく、さらにその下層の地山面においては、自然の侵食作用の痕跡が谷状地形となってあらわれている。さらに西斜面においては、給水タンク鉄塔が最近まで建っており、鉄塔建造の際には墳丘削平を行ったことが想定される。以上のように、本古墳は、後世の人為的、或いは自然による地形の改変をうけていることが充分推測される。又、墳丘を特徴づける濠や段築、或いは埴輪や葺石といった外部施設は、まったく検出されなかった。従って、その墳形やその規模といったことは、明確には把握されなかった。しかしながら、墳丘実測図を見る限り、一辺15m前後の方形墳であろうと推測され、墳丘の築造の際は、自然地形を充分利用して、大凡の造形を行った後、若干の封土を盛ったものと考えられる。一方、埴輪や葺石などは、後世の封土の流出に伴って失なわれたとも考えられるが、当初からそういった施設がなかったと考えるのが妥当であろう。

内部構造

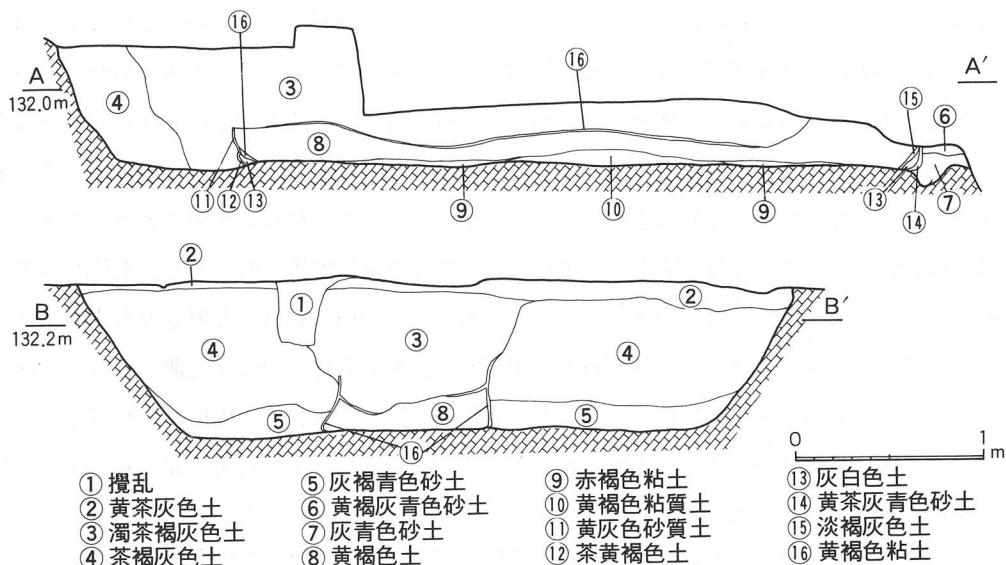
本古墳の内部構造は、木棺直葬で、墳頂部に南北5.5m、東西3.7m、検出面からの深さ80cmの墓壙を掘り、そのほぼ中央部に木棺を安置したものである。木棺は、幅70cm～90cm、長さ3.5m～3.7mを測るが、小口板の所在が明確ではなく大凡のものである。尚、木棺の形態については、床面が平らになることや、側板或いは棺蓋の痕跡と考えられる黄褐色粘土帯の形状から箱形を呈するものであったと推定される。又、釘等の検出は一切なく、おそらく組合せ式の木棺であったろうと思われる。木質の遺存についてはまったくなく、材質は不明である。木棺は、墓壙の床面直上に、その長軸が真北より東へ約13度振る方向で安置されており、北側が南側より約5cm高くなるように墓壙床面が形成されている。又、木棺の幅は、北側よりも南側が狭く、^(注)棺底部に遺存する朱とよばれる赤色顔料の状況等から、被葬者は、頭部が北側にくるよう安置せられたようである。木棺の埋設状況は、まず木棺を安置した後、その両側に灰褐色砂土を盛り、その後、茶褐色土等で、土壙全面を覆っている。尚、排水施設等は認められなかったが、墓壙床面の一部が砂地であり、自然条件として排水性に優れていたと考えられる。

(注) 赤色顔料の顕微鏡観察によると、辰砂(HgS)の細粒が多数観察され、同時に辰砂粒を包含する岩片も存在することから、鉱石を粉碎したものと思われる。又、少量であるが、辰砂のみが1～2mmの大きさに集中している部分も存在することから、粗悪な朱と良質の朱2種を使い分けた可能性も考えられる。（富賀肇）

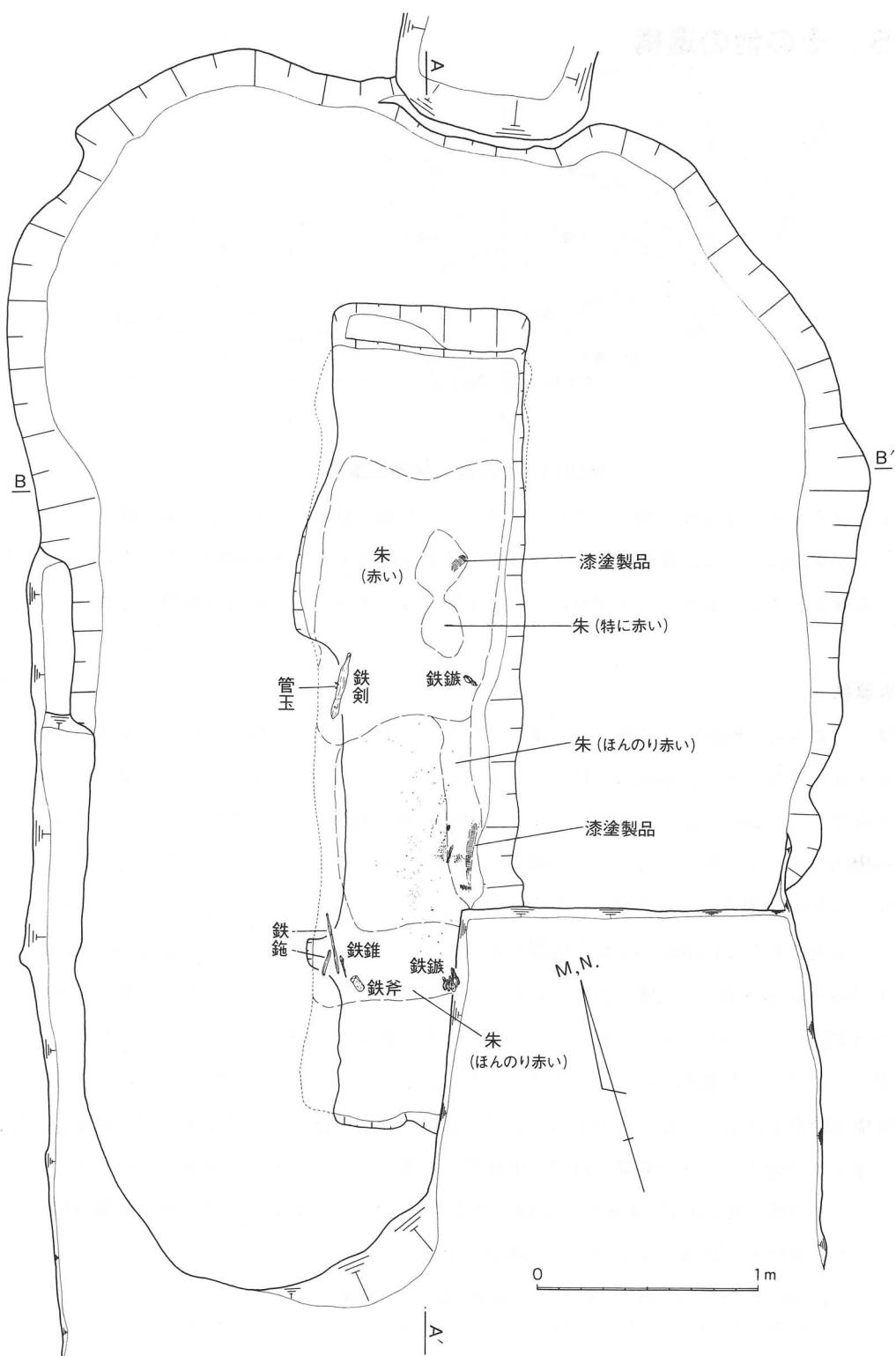
4. 主体部出土遺物の配列

主体部が後世の盗掘等を受けていないため、遺物は副葬された当初の状況を良好に保って残存していた。遺物はすべて棺内床面から出土しており、総数32点を数える。

遺物は、遺体を取り囲むように配列してあることがわかる。棺中央の西端に接する内側に鉄剣があり、剣先をやや西に偏するものの、南に向かって出土した。鉄剣の西側に接するよう3個の管玉が遺存していた。出土状況から管玉は、首に装飾されたものではないことが推測される。鉄剣から1.2m南の棺西端には、西側から順に短い柄をもった鉈1本、長い柄をもつた鉈1本、錐1本および鉄斧1個が一括した状況で、東西20cm、南北40cmの範囲にそれぞれ先をほぼ南に向けて遺存していた。これらの木工具の一群と相対して棺東端に12本の鉄鎌が一群をなして、鋒を南に向けて配列してあった。一群の中には有柄鉄器が1点含まれる。鎌身以外の部分はすでに朽失しているが、もとは矢柄に装着したまま副葬された状況であったことが、北側の痕跡でもうかがえる。鉄鎌群の北側に50cm離れて漆膜状の痕跡が細長く遺存しており、鉄鎌の方向と一致するところから、弓の一部と思われる。また、1.4m北側に離れて3本の鉄鎌がほぼ重なった状況で、鋒を北西に向けて遺存しており、南側一群と違なる点で注意される。最も北側には、朱が特に濃く残存する部分に、長さ10cmを測る漆膜状の痕跡がほぼ東西方向に遺存しており、遺体の上半部付近に位置することとの関連性も考えられる。

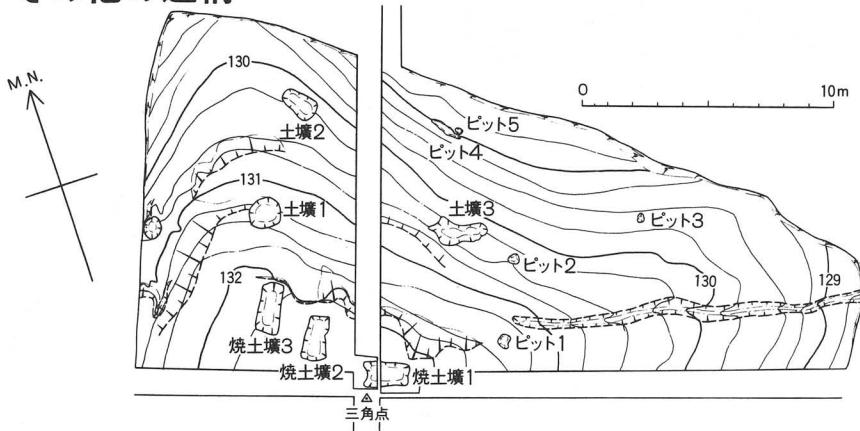


挿図11 主体部断面図



挿図12 主体部平面図

5. その他の遺構



挿図13 その他の遺構位置図

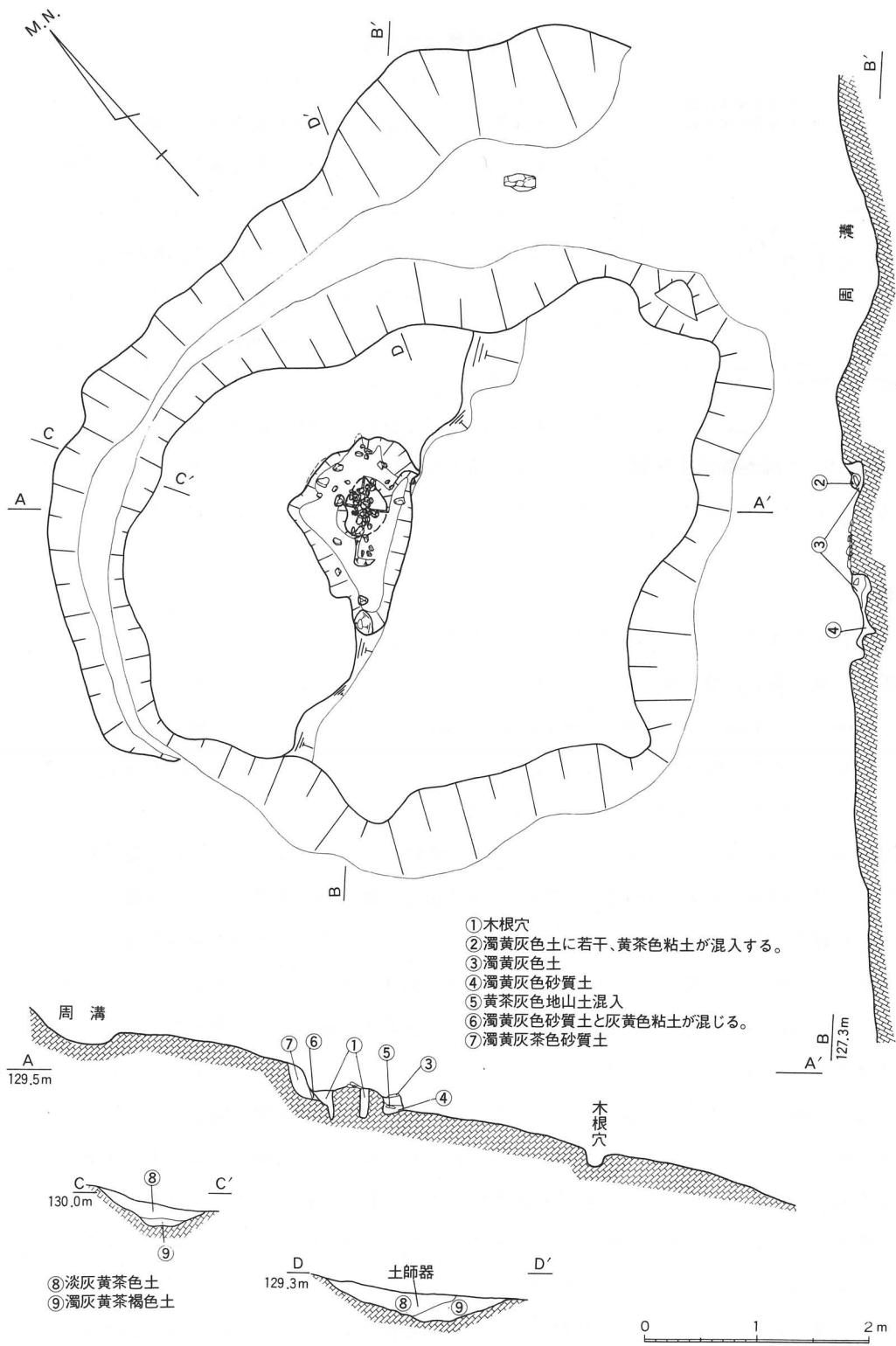
本古墳々丘上では古墳に関係するもの以外に、火葬墓と思われるもの1、焼土壙3、土壙3、ピット5を検出し、又、遺構を伴わないが、土師器が散布する地点を検出した。それらの遺構は、火葬墓と思われるものと土師器散布地点を除けば、すべて北斜面及び墳頂に位置している。

火葬墓

墳丘の東斜面で検出した遺構で、土壙とそれをとりまく周溝とで構成される。全体の規模は、南北6m、東西6mで、形状は不整形である。土壙は、1.2m×1.8mの流滴形を呈し、そのほぼ中央部には、40cm×60cmの規模で、島状に地山を掘り残している。換言するなら、40cm×60cmの楕円形が、その内周となるように周溝を成形したものである。尚、その掘り込み部の深さは20cm～30cmを測る。この土壙からの出土遺物は、まったく見られないが、中央の島状部の上には、拳大に充たない河原石が數十個置かれていた。一方、周溝であるが、幅0.5m～2.5m、深さ15cm～40cmを測り、土壙の西方から北方を経て東方に至っている。即ち、土壙の山側のみに周溝が認められ、山側より土壙に向けて流れ来たる雨水等を横へ迂回させる為のものであると考えられる。この周溝からは、奈良時代のものと考えられる土師器の甕が出土しており、この遺構の時期を決定づけるものである。さて、この遺構の性格についてであるが、眺望の良好な丘陵上に立地することや遺構の時期、形態等から考えて、おそらく火葬墓であろうと思われる^(注)。又、本古墳の東北東約200mで、同様に奈良時代のものとされるだいだい池火葬墓が存在することも当遺構を火葬墓とすることに示唆的である。

(注) 松井忠春「富田林出土の藏骨容器」(『古代研究』第1号、1973年)

富田林市教育委員会『富田林市の埋蔵文化財 一埋蔵文化財基本分布図一』(1978年)



挿図14 火葬墓平面図・断面図

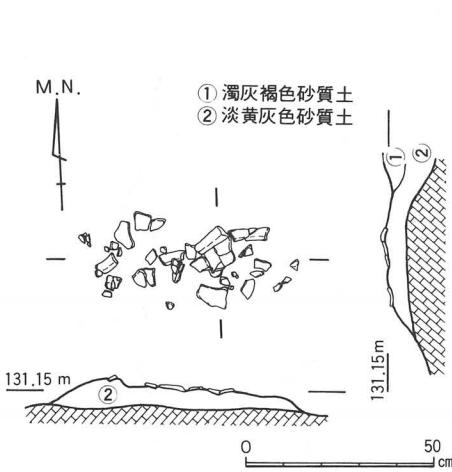


図15 土師器甕出土状況

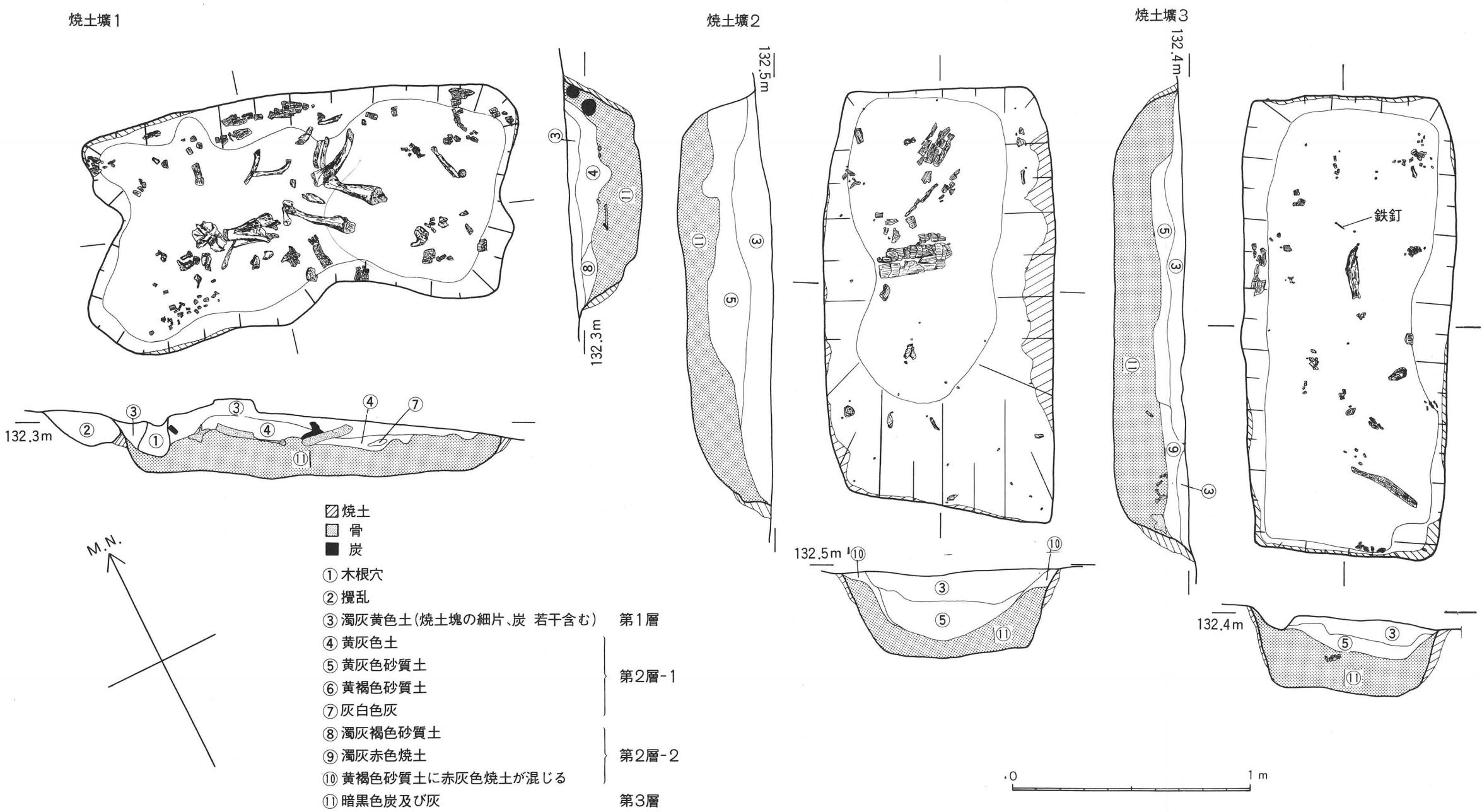
類似するもので、後世に削平をうけたものであろうことは充分に推測できるものである。

土師器甕出土地点

墳丘の南東斜面で、奈良時代のものと考えられる土師器甕片を検出した。検出地点は、古墳主体部の南東方向約8m、奈良時代の火葬墓と思われる遺構の中央土壙より西方約8mの地点である。土師器片は、地山上の淡黄灰色砂質土層上面で、南北約25cm、東西約60cmの範囲にわたって散乱していたが、これに伴うと思われる遺構は何ら検出できず、その性格を明確にすることはできなかった。しかしながら、東方で同様に奈良時代の甕を出土する火葬墓と考えられる遺構を検出したことなどから考えて、それと

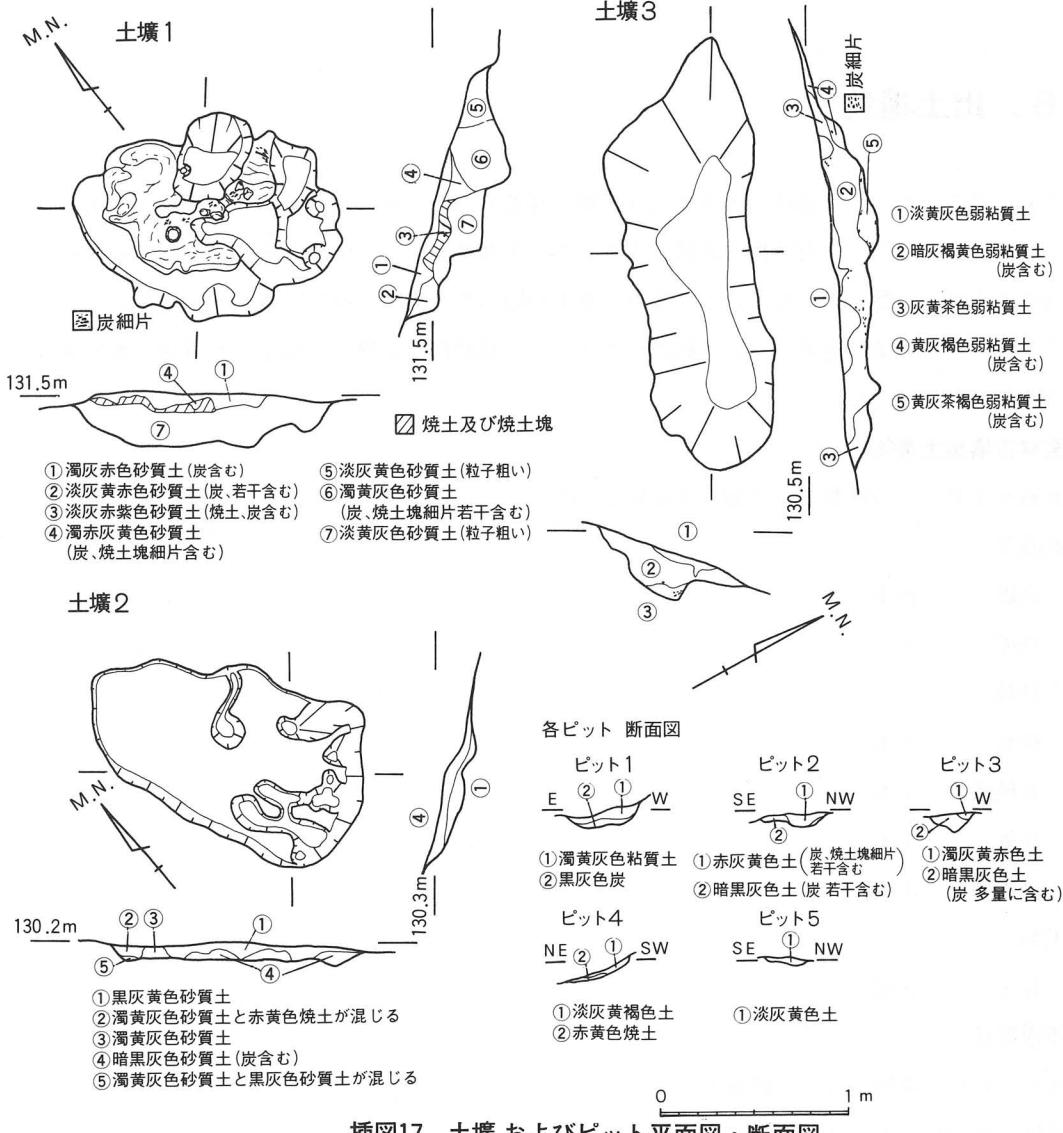
焼土壙

墳頂部の古墳主体部に北接する位置で検出した遺構で、3基検出された。今、これを東方より焼土壙1、焼土壙2、焼土壙3とする。各々の規模は、1が180cm×95cm、深さ30cm、2が180cm×100cm、深さ40cm、3が190cm×90cm、深さ30cmで、すべてほぼ同一規模の長方形を呈している。只し、その方向性については、2・3はほぼ同一で、長軸が真北から約20度東に振れているのに、1の長軸は、真北から約100度東に振れていて、2・3とは約80度の隔りがある。その内部構造については、すべてほぼ同一で、3層の堆積によって構成されている。第1層は、濁灰黄色土で焼土塊細片や炭を若干含んでいる。第2層は、黄灰色土等で、その縁辺部の一部は、濁灰赤色焼土となっていたり、赤灰色焼土が混入していたりして、焼けた痕跡が認められる。第3層は、暗黒色の炭及び灰である。又、各々の壁面は、赤灰色に焼け固まっている。遺物は、2・3から鉄釘が出土している他、3からガラス容器片、陶器片等が出土している。又、1～3のそれぞれにおいて骨の出土が見られる。特に2・3のものは、細片が多いのに対し、1のものは、比較的残りが良く、後頭骨底部、上顎前臼歯、上顎後臼歯等が確認されて、牛骨であると判断された。2・3の出土骨については、判然としないが、長軸の方向が1とは異なり、南北方向に近いことや、出土している鉄釘が樋に用いられたものであるとするならば、人間の可能性も考えられる。これらの骨はいずれも焼けた痕跡が見られる。又、骨の出土位置はほとんどが第3層上面で、それ以下では検出されない。以上のことから、これらの焼土壙は、土壙を穿った後、底部に木或いは木炭を敷き、その上に遺骸を安置してその場で焼き、埋葬したものと考えられる。時期については比較的新しく、幕末以降のものであろう。



挿図16 焼土壤平面図・断面図

土壤およびピット



挿図17 土壌およびピット平面図・断面図

遺構名	大きさ(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
土 壤 1	136×116	53		焼土塊を多量に包含する。
土 壤 2	157× 94	24		灰原状を呈する。
土 壤 3	230× 80	23	土師器、サヌカイト、炭、石	
ピット 1	37× 53	10		楕円形を呈する。
ピット 2	35× 35	8.5	鉄釘	隅丸三角形を呈する。
ピット 3	23× 33	10		楕円形を呈する。
ピット 4	120× 35	10	土師器	長楕円形を呈し、溝状である。
ピット 5	20× 15	7		楕円形を呈する。

表2 土壌およびピット一覧表

6. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の大半は宮林古墳に係るもので、それらはすべて主体部から出土している。このほか、奈良時代の遺構、すなわち、火葬墓をとりまく溝とそこから約5m離れた地点で土師器の甕が出土している。また、幕末以降の焼土壙から獸骨と鉄釘が出土している。

ここでは宮林古墳の遺物について観察したあと、奈良時代の遺構から出土した遺物、焼土壙出土遺物の順に記述していく。

宮林古墳出土遺物

武器や工具などの鉄製品、玉類、漆塗製品が出土している。

武器類

鉄鎌	15本
鉄剣	1口

工具類

鉄鋤	2本
有柄鉄器	1本
鉄錐	1本
鉄斧頭	1個

玉類

管玉	9個
----	----

漆塗製品

次にこれらの遺物について観察する。

鉄鎌 (挿図18・1~15、図版 21・1~15)

すべて有茎式の鉄鎌である。鎌身の長さは3.2cm~3.7cm(平均約3.5cm)、最大幅1.6cm~1.8cm(平均約1.7cm)をはかる。茎の長さは完存のものがないので不明であるが、最も良く残っているもので7.4cmをはかる。各々の法量は表3の通りである。鎌身の平面形はすべて五角形状を呈するが、側辺に角をもつ定角式に近いものと丸みをもつ椿葉形に近いものがある。また、鎧のあるものとないものもある。そこでこれらを以下のように分類する。

定角式に近いもの

鎧のあるもの A-1類 (1~6)

鎧のないもの A-2類 (7、8)

椿葉形式に近いもの

鎧のあるもの B-1類 (9~11)

鎧のないもの B-2類 (12~15)

法量 鉄鎌番号	残存長(cm)	鎌身部長(cm)	鎌身部最大幅(cm)	鎌身中央部厚(cm)	鎌身基部厚(cm)	茎部長(cm)	茎部最大径(cm)	重量(g)
1	7.4	3.7	1.8	0.5	0.6	3.7	0.9	11.7
2	5.9	3.6	1.8	0.6	0.7	2.3	1.0	11.7
3	5.6	3.6	1.7	0.6	0.7	2.0	0.9	12.1
4	5.8	3.5	1.6	0.6	0.6	2.3	0.9	9.6
5	3.9	3.6	1.6	0.5	0.5	0.3	0.6	7.7
6	3.9	3.2	1.8	0.5	0.6	0.7	0.7	7.2
7	5.9	3.5	1.8	0.6	0.6	2.4	0.9	11.8
8	5.1	3.5	1.7	0.4	0.6	1.6	1.0	11.7
9	5.1	3.5	1.7	0.6	0.6	1.6	1.1	11.2
10	5.0	3.6	1.5	0.6	0.5	1.4	0.9	10.5
11	4.3	3.6	1.6	0.6	0.7	0.7	0.6	10.1
12	4.8	3.4	1.7	0.5	0.6	1.4	0.8	11.3
13	5.1	3.6	1.8	0.6	0.7	1.5	1.0	16.8
14	5.9	3.4	1.8	0.6	0.7	2.5	0.9	10.6
15	6.4	3.5	1.7	0.5	0.8	2.9	1.1	11.1

表3 鉄鎌法量表

ただし、これらの間に差異は少ないので、型式としては1つにおさまるであろう。断面は鎌のあるものが三角形、鎌のないものは杏仁形に近い。また、茎に近い部分の断面はすべて四角形を呈す。茎は関に接する部分で細くなっているが、その他はストレートに伸びるものが多い。また、(13)のように丸味をもってふくらむものもある。茎の上には矢竹が残り、その上を桜の皮で巻いている。桜の皮の上には黒漆を塗布している。

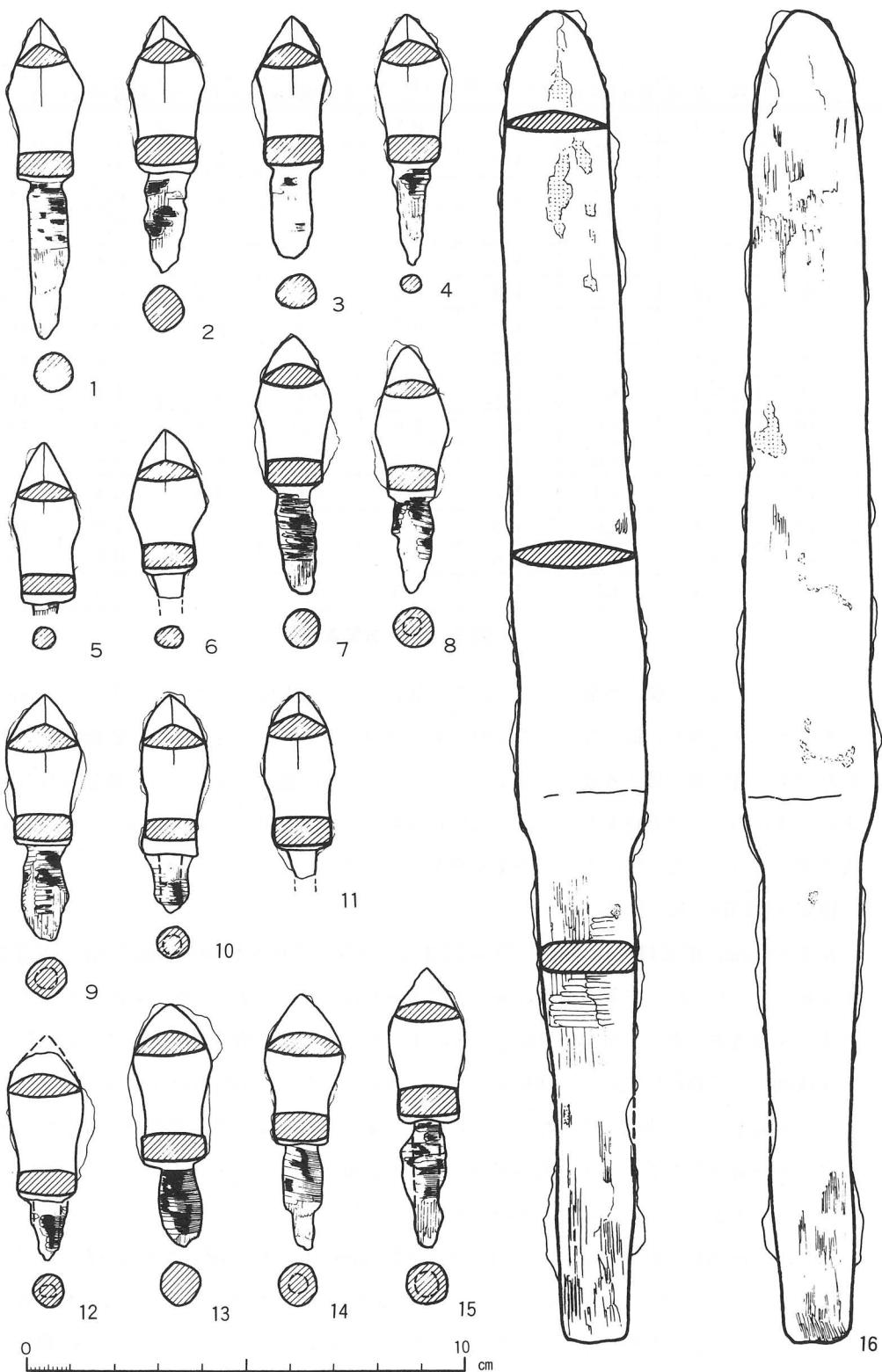
鉄剣（挿図18・16、図版21・16）

長さ30.5cm、重量111.4gをはかる短剣である。剣身部は長さ17.9cm、幅2.9cm、厚さ0.6cmをはかる。これに対して茎の長さは長く、12.6cmをはかることから、槍の可能性もすてがたい。将来、X線透過によって茎部の目釘孔を確認することで、剣か槍かを決定することにし、ここでは鉄剣として観察しておく。剣身面には鎌は認められない。剣身部には木質が付着しているので、木鞘を具して埋納していたことがわかる。また、一部に朱の付着がみられるのは床面にあった朱が着いたのである。把の部分は杷木の上面に紐を巻いている。

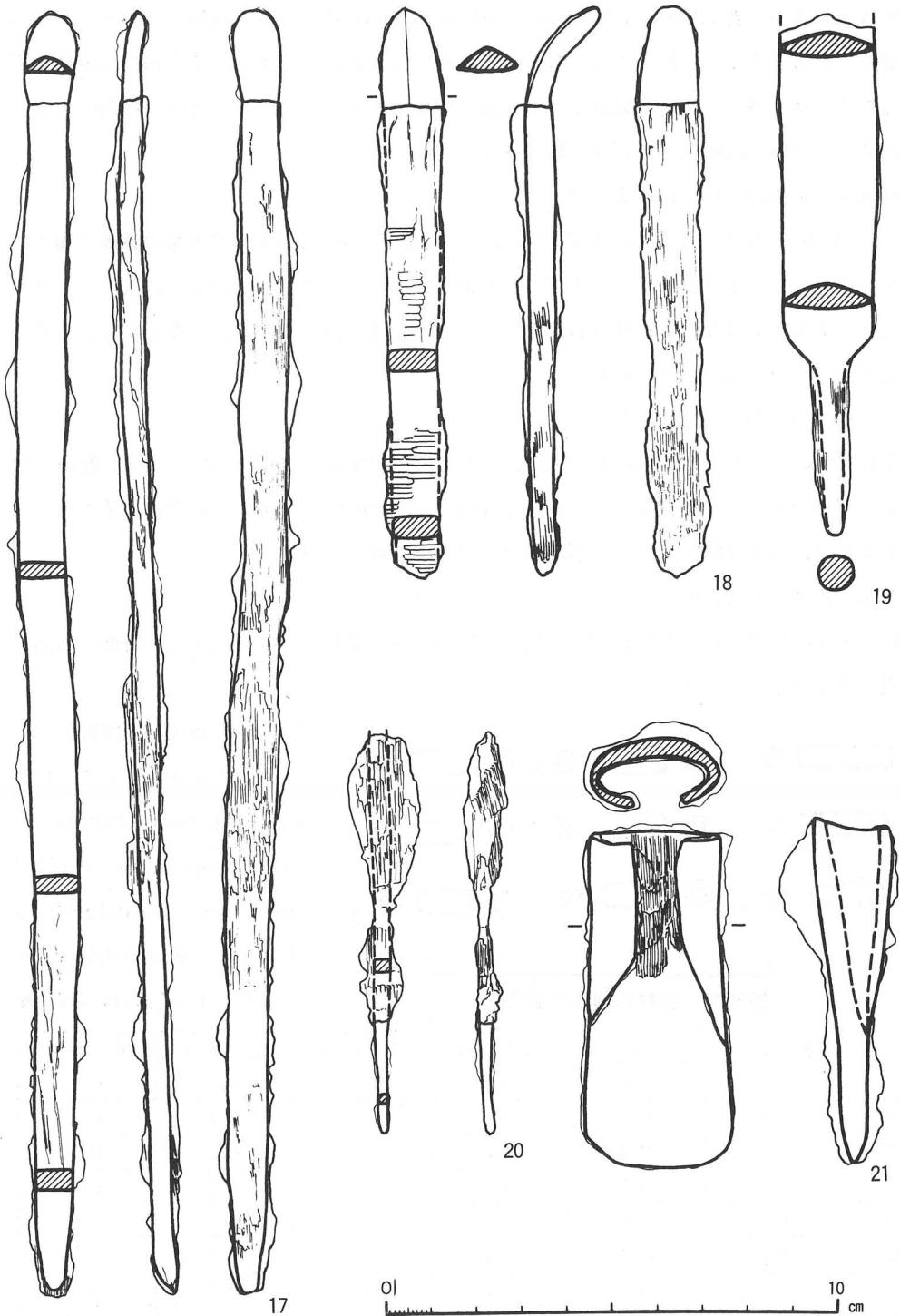
鉄鎌（挿図19・17、18、図版22・1、2）

長さ28.5cmの長い柄を備えたもの(17)と長さ12.6cmの短い柄を備えたもの(18)がある。

(17)は平均すると幅1.1cm、厚さ0.5cm、重量26.5gの大きさである。3方向に木質部が付着していることから、木柄に穿った凹溝中にはめこんで装着していたことがわかる。鋒は2.0cmの長さの部分が突出し、片側へゆるやかに反る。両縁に刃が着く。鎌は通らない。尾端はすぼまる。



插図18 宮林古墳出土鐵製武器



挿図19 宮林古墳出土鉄製工具

(18) は平均すると幅1.2cm、厚さ0.5cm、重量35.2gをはかる。(17)と同様に3方向に木質部が付着していることから、同じ方法で装着していたことがわかる。また、この鉈には木柄を固定するための紐も残っている。鋒は2.2cmの長さの部分が突出し、(17)に比べて片側へ大きく反りかえっている。両縁に刃が着き、鎬が通る。

有柄鉄器（挿図19・19、図版22・3）

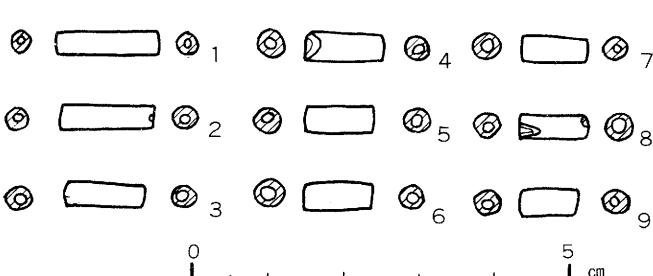
残存長11.3cm、幅2.2cm、重量28.7gをはかる。先端が欠失しているので大型の鉄鎌か鑿かはつきりしないので有柄鉄器とした。南側の鉄鎌群といっしょに出土しているが、茎のつくりが鉄鎌と違って矢竹ではなく、木柄を着けていること、全体に長大であることなどから、工具としての可能性の方が高いと考えられる。

鉄錐（挿図19・20、図版22・5）

残存長8.9cmの大きさで、先端に近い部分は直径0.2cmの円形の断面を呈している。錐身は柄に接する部分から徐々に幅をまし、0.3cm×0.4cmの方形の断面をなすようになる。茎の長さは不明であるが、柄木は残っている。柄口の近くには紐が残っている。

鉄斧頭（挿図19・21、図版22・4）

無肩の袋状鉄斧で、長さ7.7cm、幅3.2cm、厚さ0.5cm、重量74.8gをはかる。袋部の内部には木柄の木質が残っている。



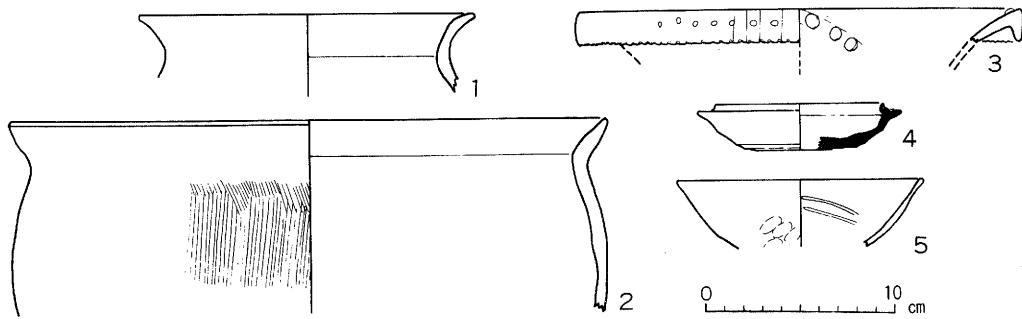
挿図20 宮林古墳出土管玉

管玉（挿図20、図版23）

すべて小さな管玉で、長さ0.7cm～1.4cm（平均0.9cm）、外径0.3cm～0.4cm、内径0.1cm～0.2cm、重量0.1g～0.2gをはかる。各々の法量は表4の通りである。石材は緑色細

管玉番号	法量	長さ(cm)	左外径(cm)	左内径(cm)	右外径(cm)	右内径(cm)	重量(g)
1		1.4	0.3	0.1	0.3	0.1	0.2
2		1.2	0.4	0.1	0.3	0.1	0.2
3		0.9	0.4	0.2	0.3	0.2	0.1
4		1.0	0.4	0.2	0.3	0.1	0.1
5		0.9	0.4	0.1	0.4	0.2	0.1
6		0.9	0.4	0.2	0.3	0.2	0.1
7		0.9	0.4	0.2	0.3	0.1	0.1
8		0.9	0.4	0.1	0.4	0.2	0.1
9		0.7	0.4	0.2	0.3	0.1	0.1

表4 管玉法量表



挿図21 奈良時代およびその他の遺物

(注1)
粒凝灰岩である。

(漆塗製品 (図版23・10、11)

黒漆を塗布した木製品が2ヶ所で出土した。すなわち、頭部と考えられるところと北と南の鉄鎌群の間である。ともに器種はわからない。ただし、後者のは紐を固定するために塗布したらしく、巻いた紐と黒漆が残っている。

奈良時代の遺物

火葬墓をとりまく溝から土師器の甕と須恵器が2点、そこから約5m離れた地点から土師器の甕が出土している。以下、火葬墓をとりまく溝から出土した遺物を観察したあとで、後者の土師器の甕を観察する。

土師器の甕 (挿図21・1、図版24・1)

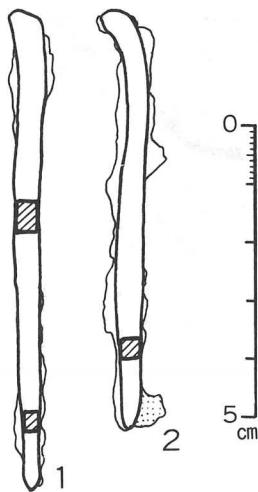
口縁部の形状から2種類あるように思われるが、細片が多いので点数ははっきりしない。実測した甕は、口径17.6cm、残存器高4.4cmをはかる。口縁部はゆるやかに外反し、端部は尖り気味におさまる。調整は内外面とも横ナデを施している。

須恵器

壺もしくは甕の体部らしきものが2点出土している。1点は外面に平行タタキ、内面は同心円タタキ目文で調整されていて、外面には自然釉が付着している。他の1点は内外面とも回転ナデ調整が施されている。

土師器甕 (挿図21・2、図版24・2)

口径31.4cm、腹径30.7cm、残存器高10.5cmをはかる。口縁部は「く」の字に外反し、口縁端部は丸くおさまる。体部は張り出さない。調整は口縁部内外面とも横ナデ、体部外面は刷毛目、内面は磨滅のため不明である。



挿図22 焼土壙出土鉄釘

焼土壙出土遺物

焼土壙1～3のすべてで骨が出土している。また、焼土壙3からは鉄釘が出土している。

牛骨（図版24・9）

焼土壙1から多く出土している。出土した牛骨は後頭骨底部、肩胛骨、上膊骨、撓骨、主腕前骨などがある。また、上顎前臼歯と上顎後臼歯などの歯も出土している。図版24にあるのは後頭骨底部、上顎臼歯、撓骨である。以上の骨格から、頭が小さく、足が太いという特徴^(注2)をもつ農耕用の牛であったことがわかる。

鉄釘（挿図22・1、2、図版24・7、8）

(1)は長さ8.2cm、(2)は長さ7.2cmをはかる。ともに断面は四角形である。(2)の先端には骨片が付着している。

その他の遺物

以上のような遺構から出土したもの以外に、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器の他、瓦、サヌカイトの剝片、鉄釘などが出土している。以下、図示した弥生土器の広口壺形土器、須恵器の杯身、瓦器の椀についてだけ観察する。

広口壺形土器（挿図21・3、図版24・3）

口径28.3cm、残存器高1.9cmをはかる。大きく開く口縁部に下方へ拡張する口縁端部をもつ。磨滅のため消えているが、口縁部外面には簾状文が施されていたと思われる。簾状文の上から刺突文、口縁部下端には刻み目が施されている。口縁部内面には円形浮文が付加されている。調整は内外面とも磨滅が著しく不明。生駒西麓産の胎土で作られている。

杯身（挿図21・4、図版24・4）

口径9.0cm、受部径11.1cm、たちあがり高0.5cm、器高2.5cmをはかる。器体の扁平な杯身である。たちあがりは内傾したのち、つまみあげている。口縁端部は尖り気味である。たちあがりはオリコミ手法によって作られている。調整は底部外面に回転ヘラケズリ、外底面はヘラ切り未調整、その他はすべて回転ナデ調整である。

椀（挿図21・5、図版24・5）

口径13.2cm、残存器高3.0cmをはかる。丸味のある器体をもつ。大きく開く口縁部の端部は丸くおさまる。内面には暗文が認められる。調整は口縁部内外面が横ナデ、体部内面および外面上半はナデ、体部外面下半には指オサエが残る。

（栗田）

(注1) 大阪府立藤井寺高等学校教諭 富賀肇氏の鑑定による。

(注2) 大阪府立農芸高等学校教諭 北園功・松尾正敏両氏の鑑定による。

ま と め

富田林市における古墳の分布は、谷に臨む丘陵突端や台地縁等に点在するのが特徴である。とりわけ、石川谷を東に臨む羽曳野丘陵上において顕著である。今回の調査によって、羽曳野丘陵上における新たな古墳を発見するに至り、石川中流域に分布する前期古墳の一例を知り得た点で、貴重な資料を提供したと言える。以下、調査によって知り得たことをまとめてみるとする。

本古墳周辺は、戦前に開拓団の手によって開墾された地域であって、本古墳も一部畠地として開墾を受けていた。^(注1)古墳発見時における墳丘測量図からみて、外形に表われた墳丘の形状は、丘陵を利用した方形墳と考えられた。しかし、調査を進め、墳丘の全容を明らかにした時点では、円墳の可能性も充分に考えられる。規模についても同様に、明確にはしがたいが、方形墳とするならば一辺15m前後とみられる。外部施設については埴輪、葺石等はまったく認められず、当初から施されなかった可能性が高い。

古墳の主体部は、幸いにも完存していた。内部主体は、粘土櫛を伴う割竹形木棺を持つ前期古墳特有の例はみられず、地山を掘り込んだ墓壙内に箱形木棺を直葬した形態を持つ。排水施設についてはまったく認められなかった。これは、主体部の基底部の地山が砂層を形成していることとの関係であろうか。いずれにしても、主体部の構造は簡素なものと言える。

本主墳出土の遺物の中で、古墳の築造年代を推測しうる資料として鉄鏃があげられる。15本の鉄鏃が出土したわけであるが、その中に定角式に近いものがある。本文中でA類として取り上げたものである。本古墳の南西1.2kmには、定角有範被式という分類に属する銅鏃を出土した甘山古墳がある。^(注2)この銅鏃は、鏃身の両面に明確な鎬をもち、茎には円錐形に近い範被のあるもので、後藤守一氏は銅鏃の中で最も形状の複雑なもの一つとして表現されている。この銅鏃の形式変遷から、甘山古墳は前期末、つまり4世紀後半の古墳とされており、宮林古墳出土の鉄鏃が甘山古墳のそれと類似する点で、本古墳の築造年代を推測することが可能である。さらに、本文中に椿葉形に近いもの、B類として取り上げた鉄鏃がある。本古墳の北東2.5kmには、椿葉形の鉄鏃を出土した真名井古墳が位置しており、同古墳の築造が4世紀末とされていることと考え合わせると、本古墳の築造年代は、4世紀後半に比定できると考えられる。また、本古墳出土の管玉の材質が碧玉製ではなく、緑色細粒凝灰岩製であることもその要素を含んでいる。

次に、被葬者について考察を加えるならば、本古墳が前方後円墳の形状を持たないこと、副葬品に鏡を持たず全体に貧弱であること、内部構造が組合わせ式の箱形木棺を直葬した簡素な

ものであること、鉄鎌が甘山古墳出土の銅鎌を意識して造られていることから、被葬者は、甲田・錦織地域を統合していた首長クラスではなく、階級的に低い権力者であったと考えねばならない。

宮林古墳の墳丘および周辺からは、火葬墓、焼土壙等の遺構が検出された。調査区東端の斜面上には、奈良時代の遺物を伴った火葬墓と推定される遺構が存在する。後世の開墾等によって完全な形状をとどめていないため、埋葬施設の正確な形態は不明である。ここより距離を近くして、北東約200mの地点には、東に平地を見下ろす丘陵突端にだいだい池火葬墓が位置する。^(注5)市域内に分布する火葬墓の大半は羽曳野丘陵上東西両縁に存在する。これらの中には、古墳の一角を占めて墓域を設けている板持古墓の例があり、今回検出したものと同様である。^(注6)また、当火葬墓が見下ろす低位段丘上に営まれた甲田南遺跡では、三基の火葬墓が検出されている。^(注7)（注8）いずれにせよ、火葬墓周辺に同時期の集落遺跡が存在することとなんらかの関係を持って営まれたと考えられ、宮林古墳周辺も墓域に含まれていたことがうかがえる。

一方、墳丘上で検出した焼土壙であるが、東端に位置する焼土壙1からは、火葬したと思われる牛の遺体が出土している。他の焼土壙との遺物からみて幕末以降のものと判断されるが、標高132mを測る丘陵上に何故火葬を施して牛を埋葬しなければならなかったのかが疑問である。おそらく、当時は宮林という字名から錦織神社の境域であったと思われ、宗教的な要素を備えたものであったのではなかろうか。

（岡本・中辻）

（注1） 富田林市教育委員会『中野遺跡発掘調査概要V』（1984年）付図

（注2） 梅原末治「近時調査せる河内の古墳（上）」（『考古学雑誌』第5巻第3号、1913年）

北野耕平『考古学より見た富田林』（『富田林市誌』、1955年）

東京国立博物館『東京国立博物館収蔵品目録（考古・土俗・法隆寺献納宝物）』（1956年）

北野耕平『富田林市史』第4巻（1972年）

（注3） 後藤守一「原史時代の武器と武装」『考古学講座』1（雄山閣、1928年）

（注4） 藤直幹・井上薰・北野耕平「河内における古墳の調査」（『大阪大学文学部国史研究室報告』第1冊、1964年）

小林行雄『古墳時代の研究』（1970年）

北野耕平『富田林市史』第4巻（1972年）

（注5） 富田林市教育委員会『富田林市の埋蔵文化財 一埋蔵文化財基本分布図一』（1978年）

（注6） 富田林市教育委員会『富田林市板持古墳群調査概報』（1967年）

（注7） 尾上実『甲田南遺跡発掘調査概要・I』大阪府教育委員会（1981年）

小林義孝『甲田南遺跡現地説明会資料』大阪府教育委員会（1984年4月7日）

富田林市教育委員会が実施した甲田都市下水路築造工事に伴う事前調査で、土師器甕を容器として用い、底部に和同開珎を数枚伴う土師器杯が埋葬されていた蔵骨器を検出した。（1980年2月）

（注8） 今村道雄『新家遺跡発掘調査概要・II』大阪府教育委員会（1980年）

今村道雄『新家遺跡発掘調査概要・III』大阪府教育委員会（1981年）

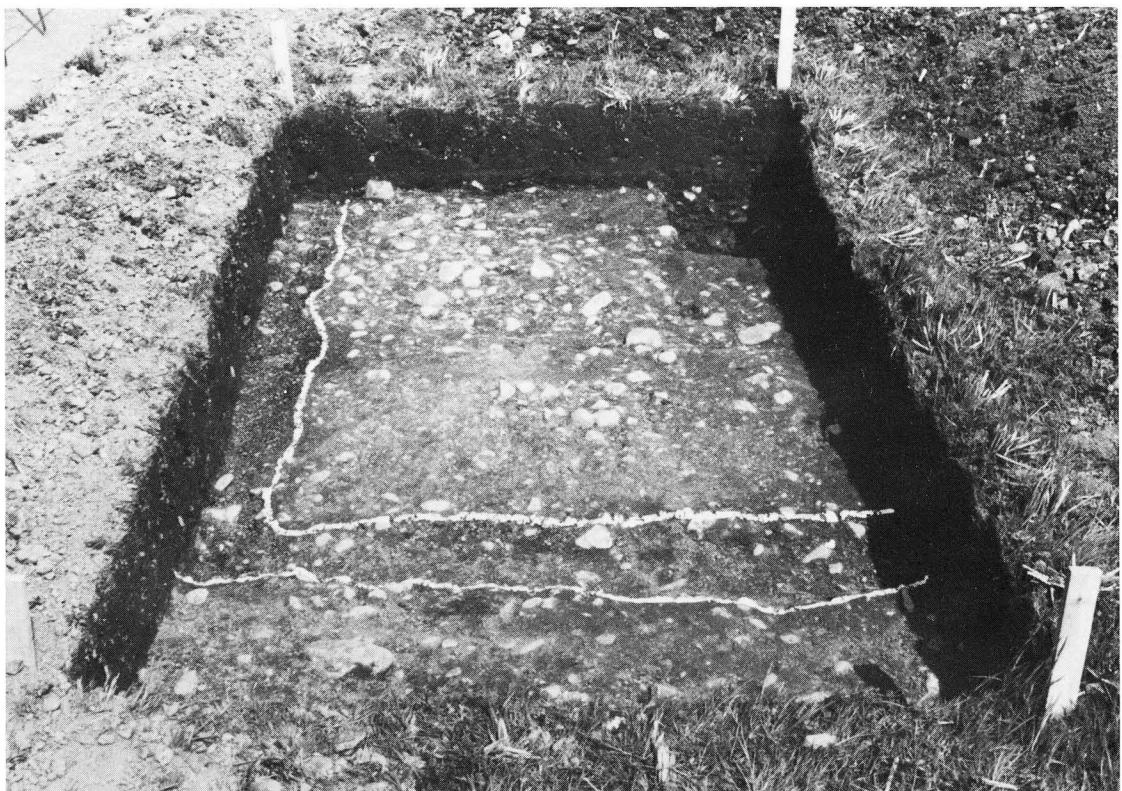
玉井功・今村道雄『新家遺跡発掘調査概要・IV』大阪府教育委員会（1982年）

図版

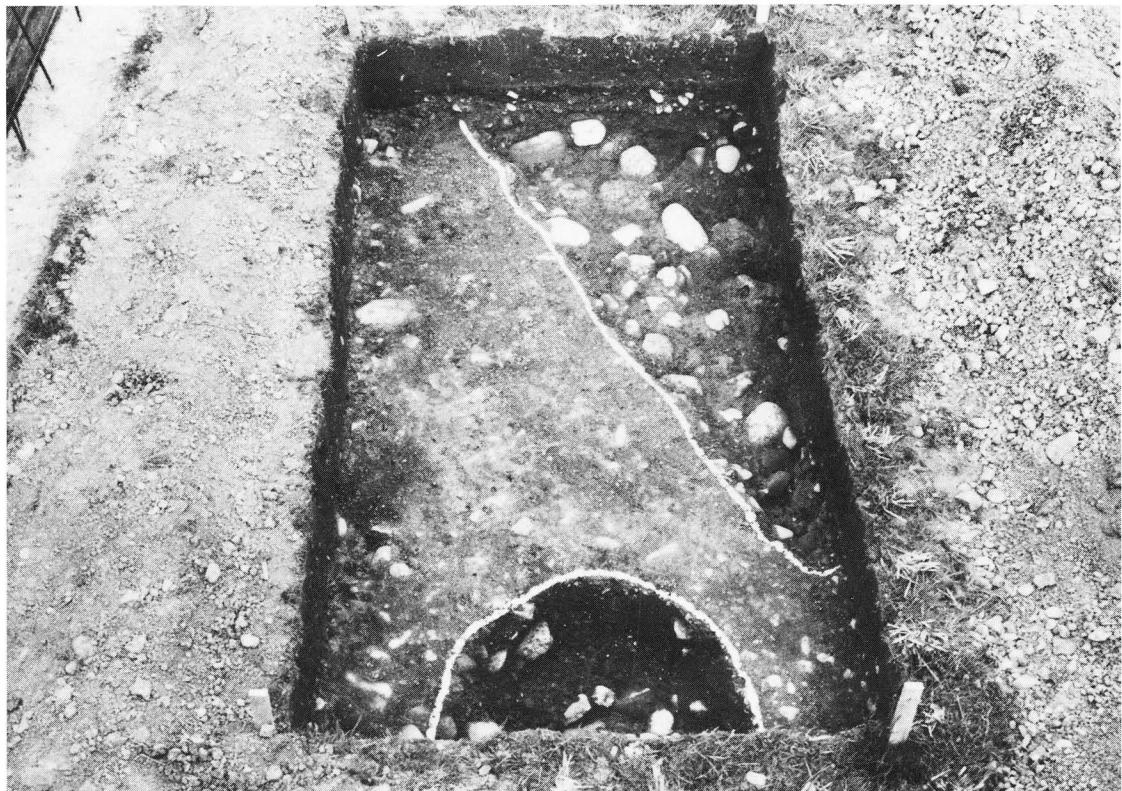
図版一
中野遺跡



遺跡周辺航空写真



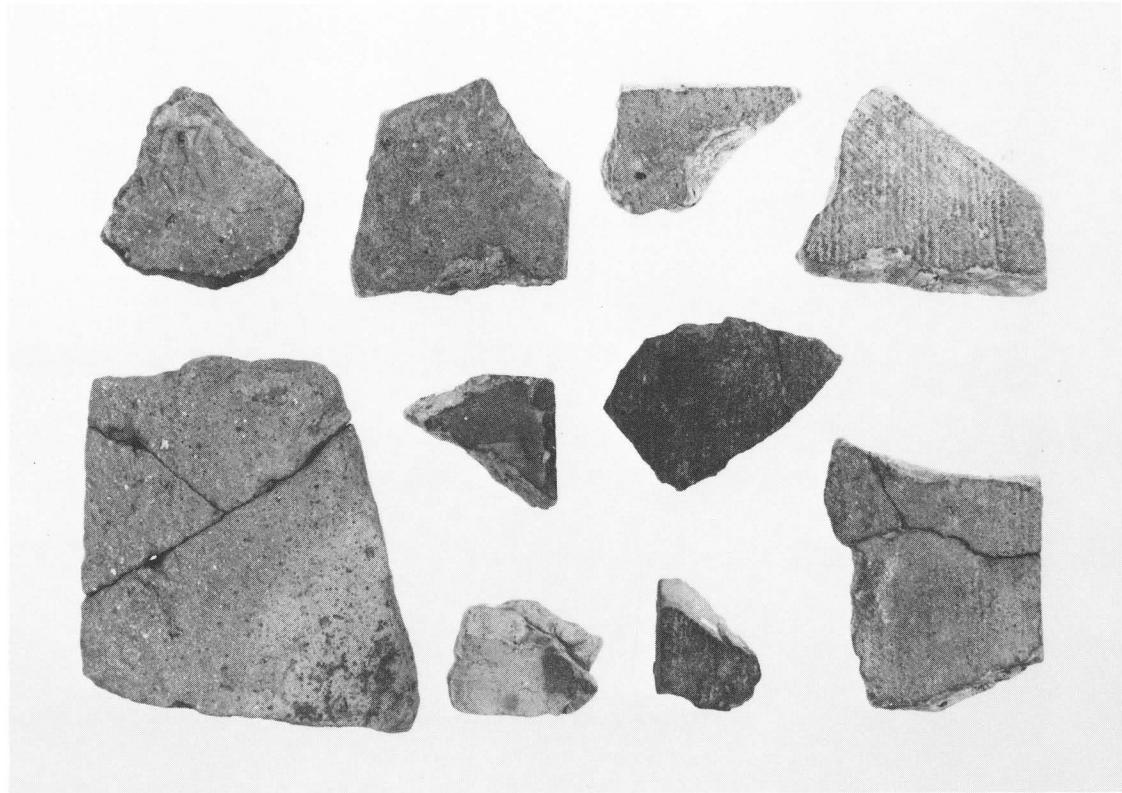
第1面遺構全景 西から



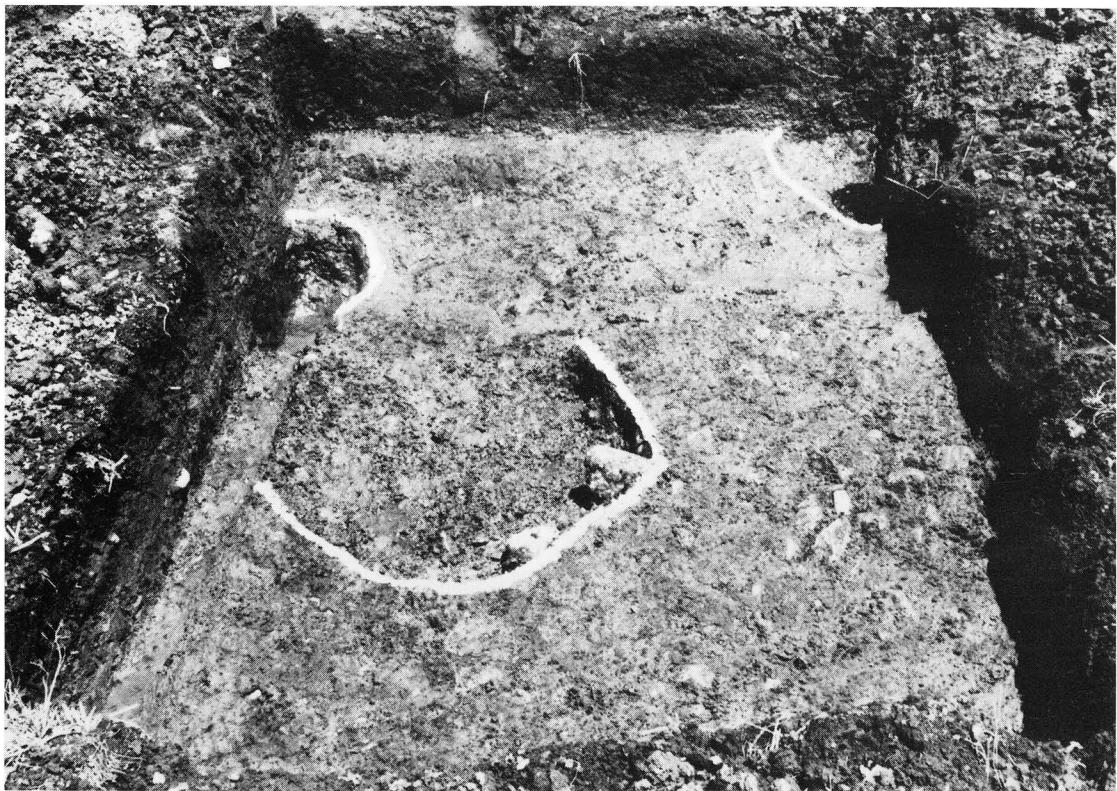
第2面遺構全景 西から



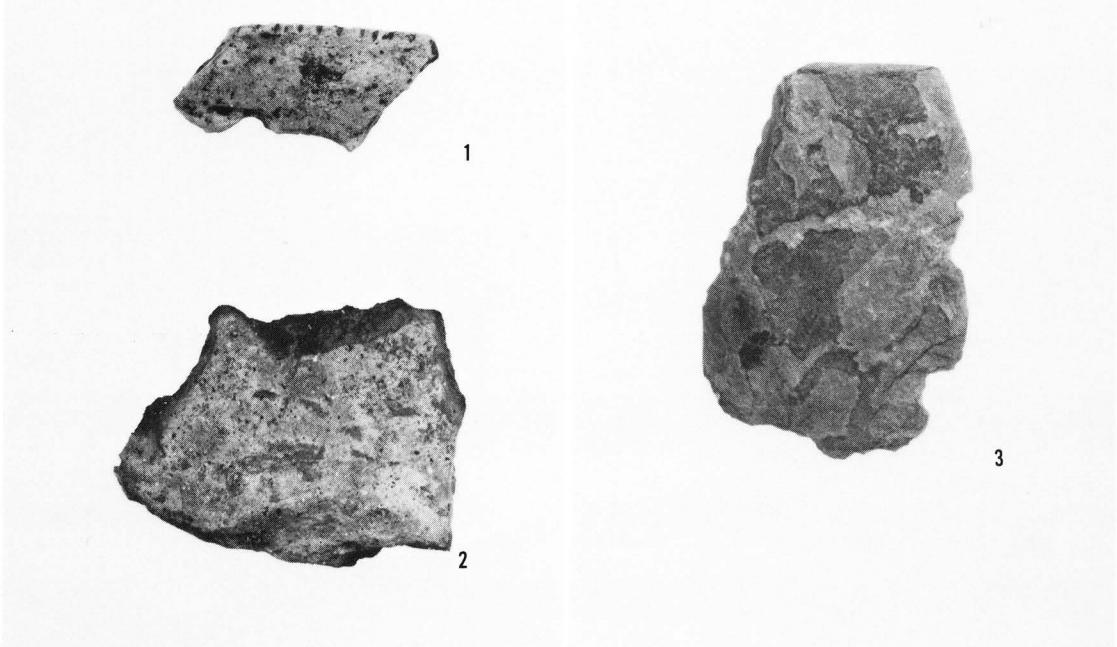
ピット2 遺物出土状況 北から



ピット2 出土瓦



遺構全景 東から



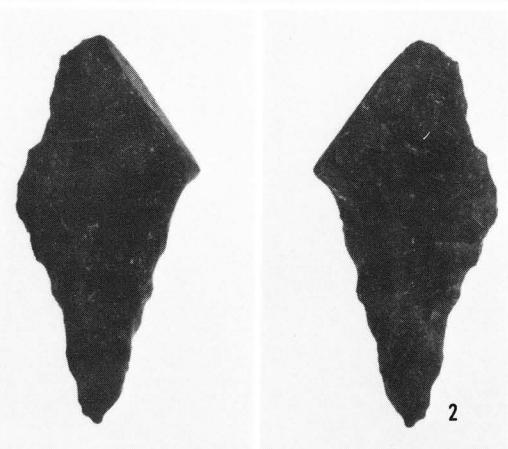
地山直上・第1層出土土器、表採石器



遺構全景 東から



1



2

包含層出土遺物

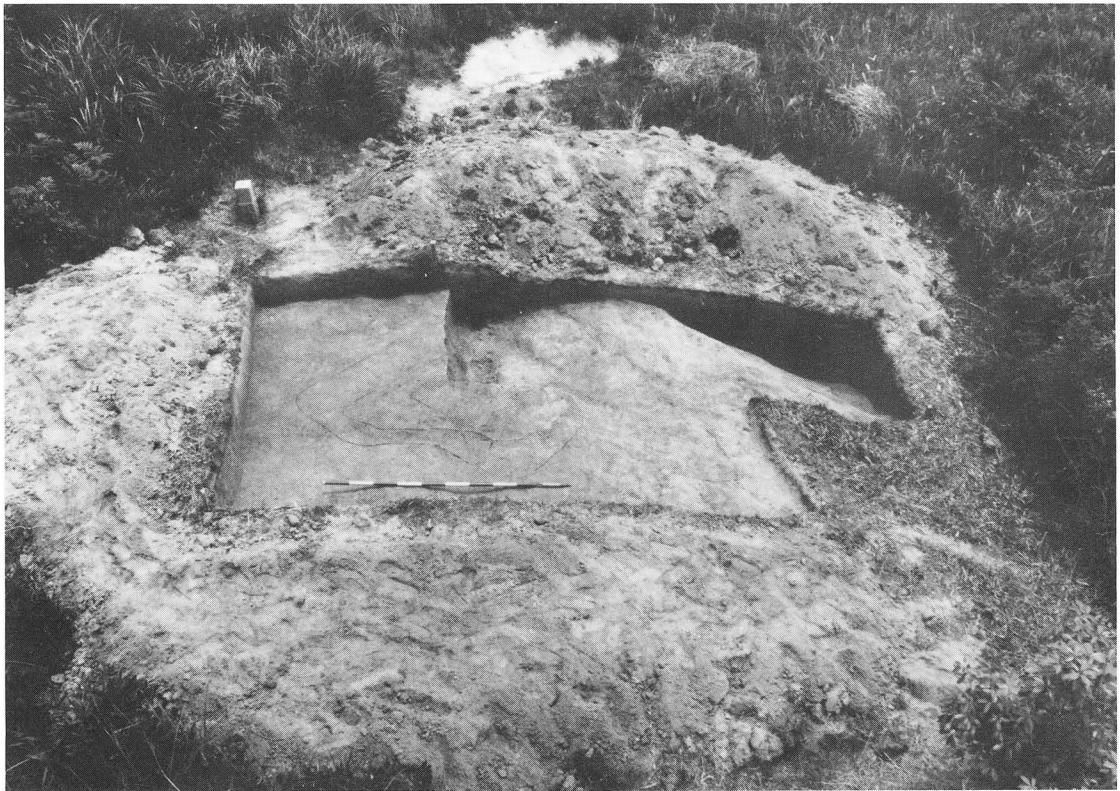
図版六 宮林古墳外形



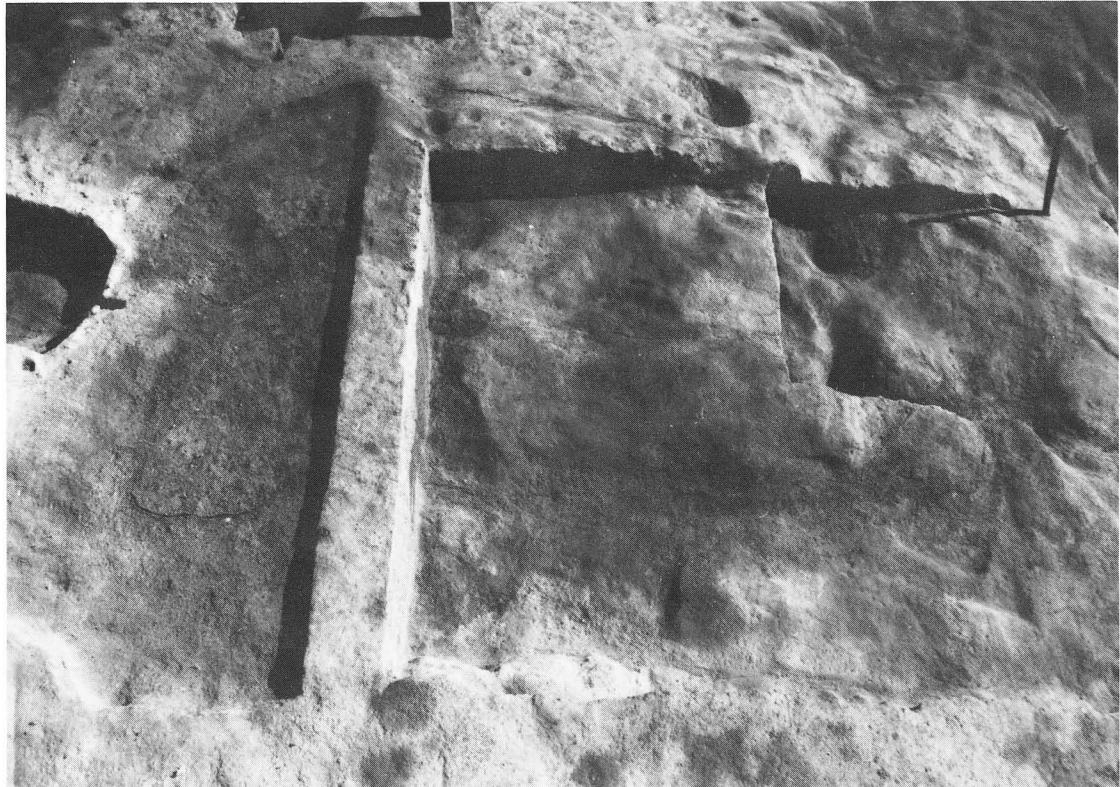
古墳遠景航空写真 南から



古墳近景航空写真 東から



試掘時トレンチ全景 西から



墓壙検出状況 西から



木棺部痕跡検出状況 南から



同上



木棺部完掘後全景 南から



木棺内遺物出土状況 南から



木棺内遺物出土状況 北から



木棺内中央西端部鉄剣出土状況 東から



木棺内南東部鉄鏃群および漆塗製品出土状況 北西から



木棺内南東部鉄鏃群出土状況 南から



木棺内南部鉄製工具および鉄鎌群出土状況 東から



木棺内南西部鉄製工具出土状況 東から



墓壙南半部完掘後全景 南から



墓壙完掘後全景 南から



墓壇完掘後近景 南西から



同上 南から



火葬墓全景 東から



同上



火葬墓全景 北東から



火葬墓中央土壤河原石出土状況 南東から



土師器甕散布状況 北から



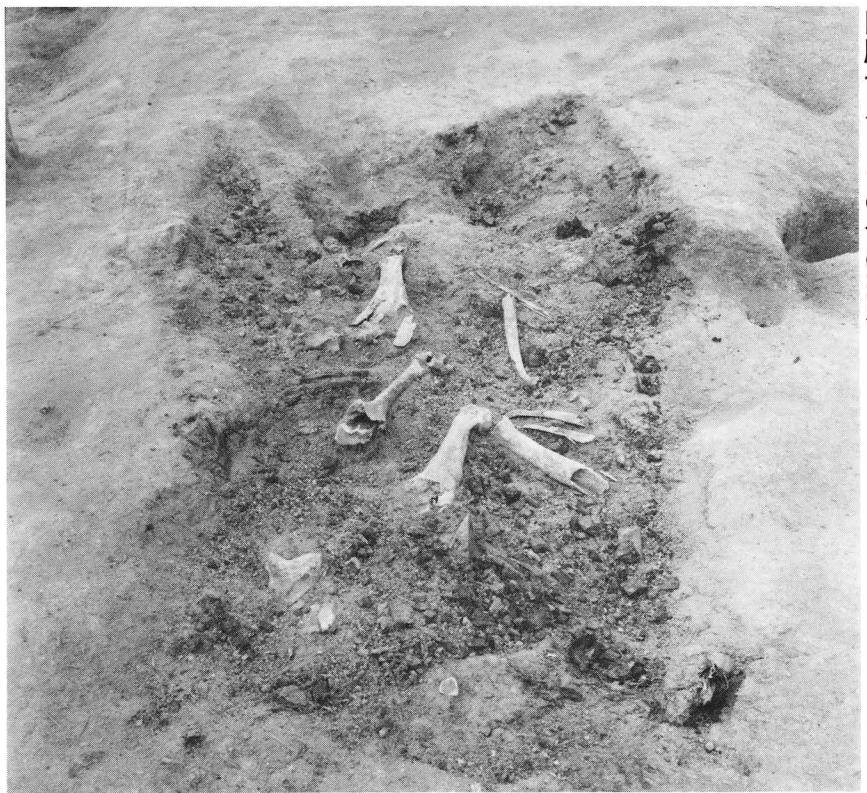
調査区全景 南から



焼土壙半掘時全景 西から



焼土壙完掘後全景 西から



焼土壙 1 牛骨出土状況 西から



同 上

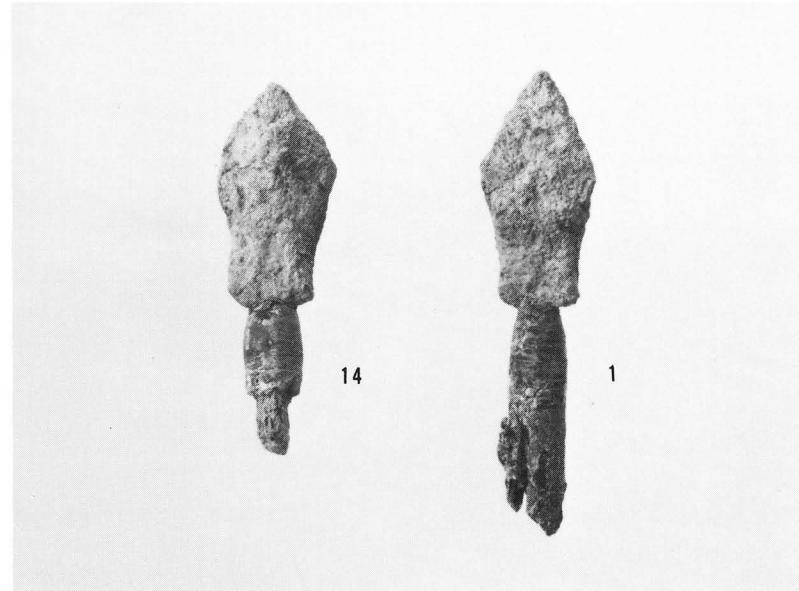
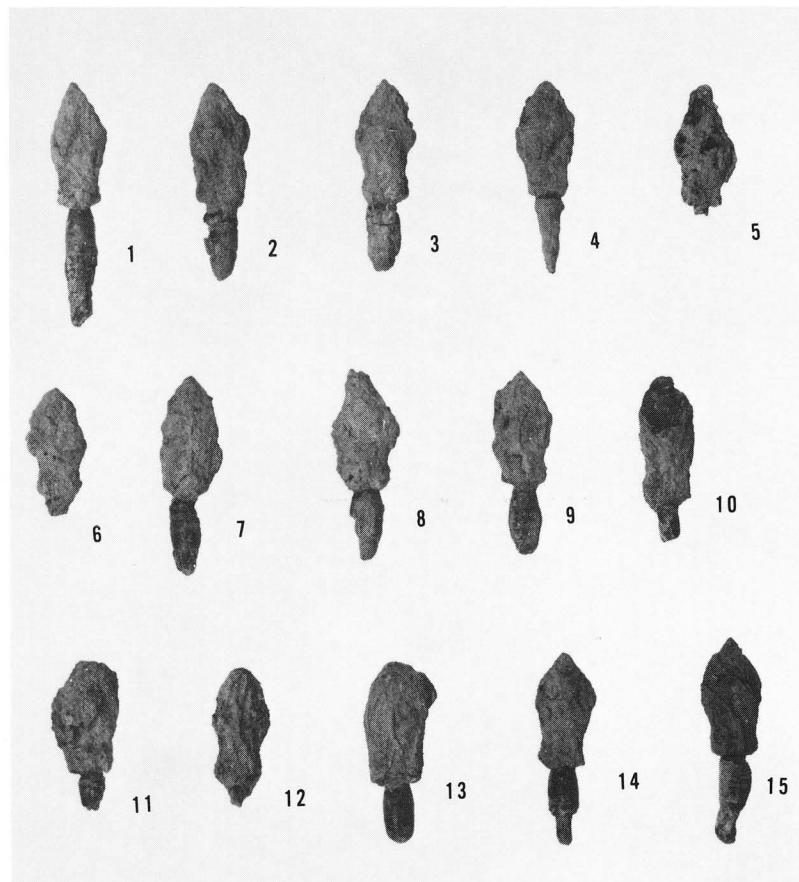


北斜面東半部遺構全景 北東から



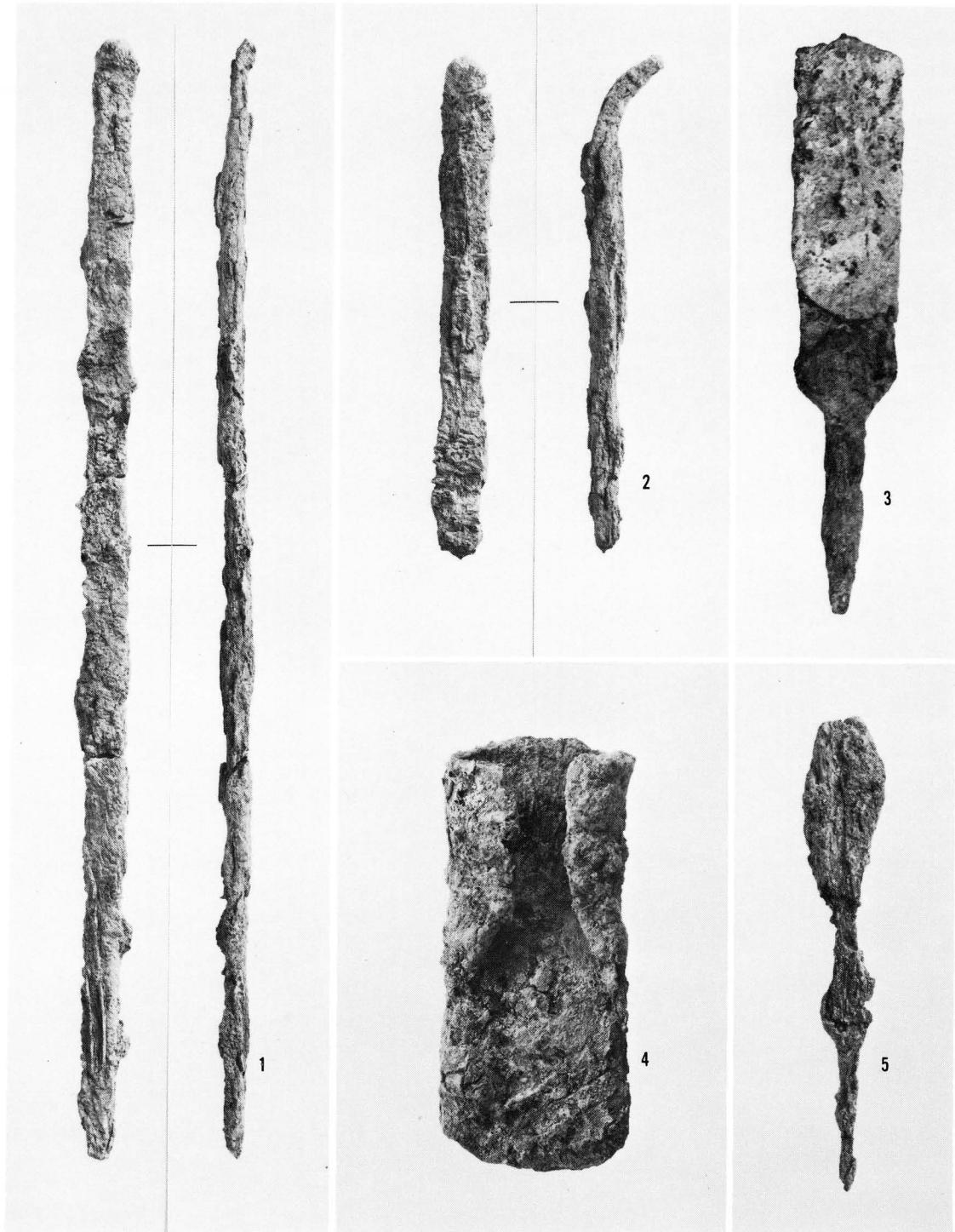
北斜面西半部遺構全景 北から

図版二十一 宮林古墳出土遺物



木棺内出土鐵製武器

図版二十二 宮林古墳出土遺物



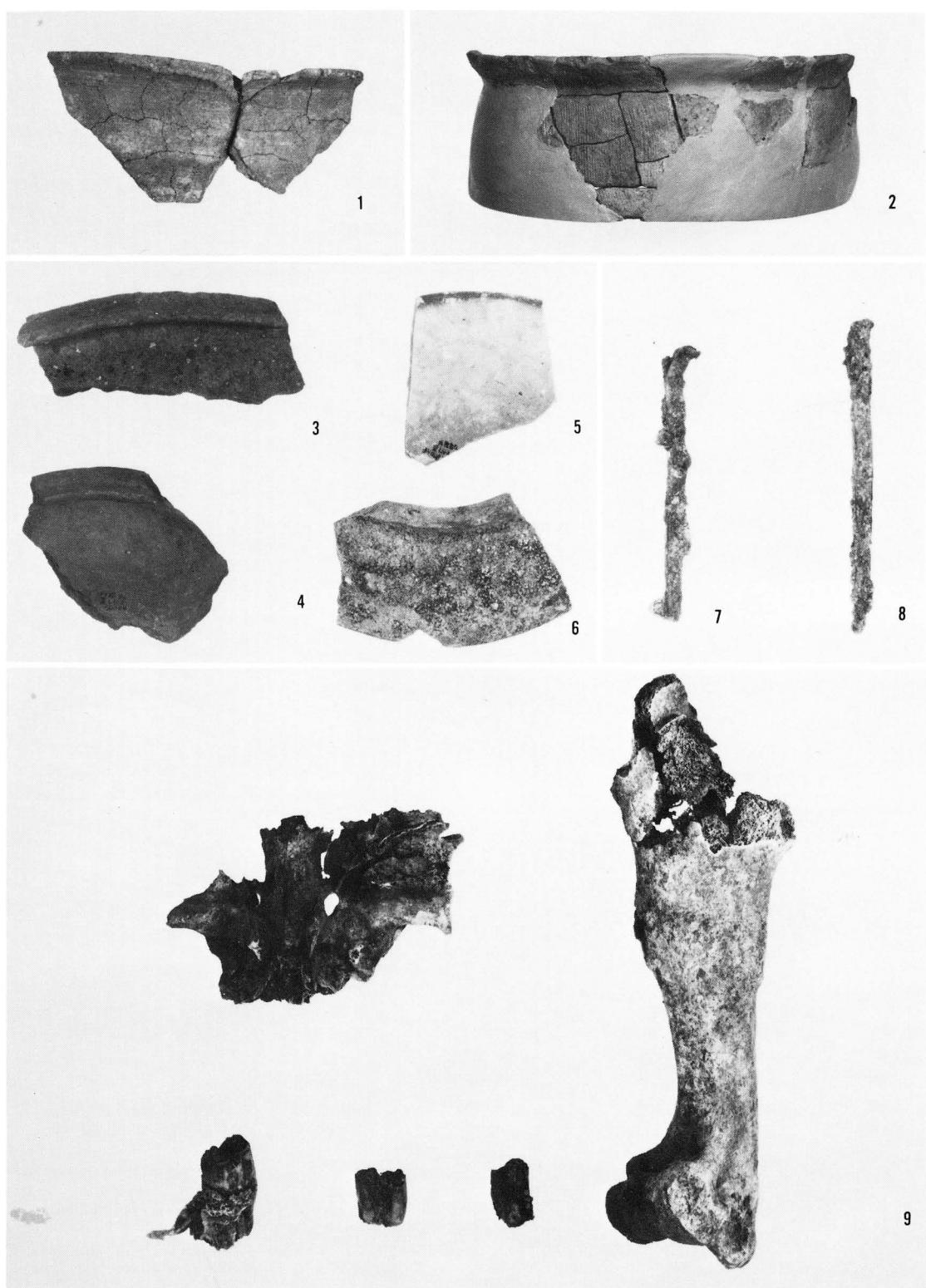
木棺内出土鉄製工具

圖版二十三 宮林古墳出土遺物



木棺内出土玉類・漆塗製品

図版二十四 その他の遺構出土遺物



奈良時代の土器、その他の土器、焼土壙出土鉄釘・牛骨

富田林市埋蔵文化財調査報告 13

発行年月日 1985年3月30日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 汐の宮綜合印刷

